

一六世紀中葡交渉初期においてポルトガル人が得たシナ情報（その一）

——ガレオテ・ペレイラ「チナ幽囚記」の翻訳および註釈——

日 埜 博 司

訳者解題

一五五六年末に華南の広州府一帯を訪れたポルトガル人ドミニコ会宣教師ガスパー・ダ・クルスが一五六九年から翌年にかけてアレンテージョ地方の中心都市エヴォラで出版した『シナ・オルムス事物誌』⁽¹⁾を、私は『中国誌』のタイトルのもとに翻訳し、多少の解題・註釈を付し、さらにコインブラ大学総合図書館蔵の初版影印を添えて、一九九六年に新人物往来社から上梓した。それに際して大きな関心を懐いたのは、クルスの記事の源泉がどこにあるのか、クルスを含めた初期の明代シナ観察者がかの国の文物にいかなるイメージを懐き、かつそれを如何にヨーロッパ世界へ伝えたか、さらに、クルスたちの記述に見られる誤解なり誤謬なりシナ文化に対する皮相的理解なりが、マッテオ・リッチ Matteo Ricci, S. J. やアールヴァロ・セメード Alvaro Semedo, S. J. と⁽²⁾西洋最初のシナ学大成者たちの著述の中でどのように補正されていったか、という点であった。クルスの著書は、ヨーロッパ語（ポルトガル語）で出版された西洋最初の中国専門書の榮譽を担い、オリジナリティーある記事と観察とに富むのであるが、その一方において、シナの裁判・牢獄・官僚制度・官員の選抜試験から、かの国におけるイスラム教徒の存在に関する問題など、『中国誌』に盛られた多くの情報の出所がポルトガル出身の冒険商人ガレオテ・ペレイラ Galeote (Galiote) Pereira にあることは明瞭である。特にクアンシ市の王府——クルスは広州府とその周辺に短期間滞在したにすぎず、ペレイラが滞在したと思われるクアンシ市（おそらく広西省桂林府であろう）には旅していない——と、それに伴う

諸王分封政策の理念に関する叙述の中ではペレイラへの恩義をきちんとその実名を挙げて表明しており、当時としてはすこぶる良心的な著述態度の持ち主であったことを窺わせる。

これから数回にわたり、リッチやセメードによって泰西シナ学が興隆期に入る以前、ポルトガル人の宣教師なり俗人なりが、華南・華中においてどのようなシナ情報を得、それを如何に評価したのかを物語る幾つかの記録を紹介してみたい。まず今回は、クルスの著書に最も多くの情報を提供し、しかも相前後して世に出たイタリア語訳⁽³⁾と英語訳⁽⁴⁾を通じて（いずれもかなり簡略化された翻訳ではあるが）一六世紀のヨーロッパにかなりその内容が知られたガレオテ・ペレイラの中国見聞記 Jesus Maria. *Algũas cousas sabidas da China por purtugeses que estiverão cativos e tudo na verdade que se tirou dum tratado que fez Galiote Pereira homem fidalgo que lá esteve cativo alguns annos e vio tudo isto passar na verdade o qual he de muito credito*（これを「チナ幽囚記」と略称する。正式のタイトルは翻訳の冒頭に掲げる）を翻訳してみる。

(1) Gaspar da Cruz, O. P., *Tractado em que cõtem muito por esteso as cousas da China, cõ suas particularidades, e assi do reyno dormuz*, Evora, 1569-1570. 再版は Lisboa, 1829 et Barcelos, 1837.

(2) *Nuovi Avvisi delle Indie di Portogallo, venuti nuovamente dalli R. Padri della Compagnia di Giesu, & tradotti dalla lingua Spagnola nella*

Italiama, Quarta Parte, Venezia, 1565, fts. 63 r-68 r.

(c) Richard Wills, *History of Travayle in the West and East Indies*, London, 1577, fts. 237-253; Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus, or Purchus his Pilgrimes, containing a History of the World in Sea Voyage and Lande Travells*, Part III, London, 1625, pp. 199-209. C. R. Boxer (ed.), *South China in the Sixteenth Century. Being the narratives of Galeote Pereira, Fr. Gaspar da Cruz, O. P., Fr. Martin de Rada, O. E. S. A. (1550-1575)*, London, 1953 (Works issued by the Hakluyt Society, Second Series No. CVI), pp. 1-43. 所収の英語訳はリチャード・ウィルスのそれを基盤としている。

ガレオテ・ペレイラはアライオロス Arraiolos (リスボンの東方「アレンテージョ」島の町) の主席判官 (Alcaide-Mor) であった父エンリケ・ペレイラ Henrique Pereira の三男として生まれた。インドへ向けて旅立ったのは一五三四年である。この年リスボアを出発した五隻の船を統轄するカピタン・モールを務めたのはマルティン・アフォンソ・デ・ソウザ Martin Afonso de Sousa であり、ペレイラの乗船はアントニオ・デ・ブリト Antonio de Brito 指揮下のサン・ミゲル São Miguel 号であった。この船の筆頭医師 (Fisico-Mor) を務めたのが、東方の薬草・薬種の研究で後に有名になるガルシア・ダ・オルタ Garcia da Ota である。ガレオテ・ペレイラは一五三九年にはペロ・デ・フアリア Pero de Faria とともにマラッカで軍役に就き、一五四七年一〇月末に、アチエー人に対する勝利を記念して行なったフランシスコ・ザビエル Francisco Xavier, S. J. の説教に出席している。この間に彼は、商売のための航海をマラッカからシナに向けて一度以上企てたようである。一五四八年、彼はザビエルの友人ディオゴ・ペレイラ Diogo Pereira に同行してシャムへ行き、シャムの首都アユタヤに侵入しようとしたペグー王タビンシユウエティ Tabinshwei の軍勢に対するシャム軍の防衛戦に参加している。引き続きディオゴ・ペレイラに同行してシナへ渡ったのは、そのしばらく後のことである。

一六世紀半ば、シナでは国是である海禁政策が有名無実化し、浙江・福建の豪族層は、公然と日本の私貿易商人を相手に商行為に手を染め、多大な利益を吸い上げていた。一方シナ官憲の感情を害して広東沿海からは強制追放の処分にあつていたポルトガル商人は、密貿易の相手を求めてシナ沿海を北上し、いわゆる倭寇の間に立ち交じって自らの持ち来った商品を捌く商機を窺っていた。海禁政策という建て前とは裏腹に、この非合法貿易は沿海の豪族たちが官憲に差し出す賄賂の力で黙認されていた。このような事態を厳しく取り締まるべく一五四七年(嘉靖二十六年)に浙江巡撫に任命された朱紘は、赴任と同時に、私貿易の基地であった浙江省隻嶼港と福建省漳州の月港を覆滅する挙に出た。前記のディオゴ・ペレイラであるが、彼は、売れ残りの商品を積載したジャンク二艘とおよそ三〇名のポルトガル人——ガレオテ・ペレイラもそのひとりである——を福建省沖合に残し、自らはマラッカへ去った。この二艘のジャンクは、広東省との境界に近い福建省南部の詔安県走馬溪において、朱紘の命を受けた都指揮使司の盧鏜と海道副使の柯喬から激しい攻撃を受け、拿捕された上、それらに乗り組んでいたポルトガル人はその他の捕虜ともども逮捕された。しかし非合法貿易によって甘い汁を吸っていた沿海の豪族層は朱紘の強硬措置に不満の声を上げ、それに呼応するかのように御史の陳九徳は、朱紘が朝廷の裁決を待たずに多くの事件関係者を刑戮したことを弾劾、査問のために現地へ派遣された兵部給事中の杜汝楨は、豪族たちの賄賂攻勢もあつてであろう、陳九徳の弾劾を是とする報告を復命した。海禁政策の忠実な遵奉者にすぎなかった朱紘はかくして失脚、「中国衣冠の盗を去るは尤も難し」と弾劾に反駁する疏文を遺して、毒杯を仰ぎ自害した。(ペレイラによれば縊死したことになっている。)

ペレイラは、公開の証人尋問などから成るシナの裁判制度および法体系の「公正」を口を極めて称賛している。が、彼にはその舞台裏に隠された事情は察するべくもなかった⁴⁾。ペレイラ自身「公正」なるものと信じたこの法体系の紊乱こそ、彼がその一味とともに助命された大きな要因であった、とは実に皮肉である。ペレイラやクルスら初期のシナ観察者

が「市場での観察はできても、書齋の秘密には立ち入れなかった」^⑤という中国史家レイモンド・ドーンソンの評言の正しさを証する一事例である。ペレイラたちが走馬溪において逮捕され広西省桂林府へ配流されるまでに彼らの辿った道のりを推定するのはかなり難しい。すなわち、彼らが福建省を出た後、江西省から広東省を経て広西省へ辿り着いたのか、それとも湖広省の南部を経由したのが、まず確定できない。しかしその道のりについて精密な考証を行なったチャールズ・ラルフ・ボクサーによれば、次のような経路、つまり前者のルートを通らされた可能性が強いという。すなわち、拿捕後、彼らは二艘のジャンクもろともおそらくは厦門（アモイ）かその近辺へ連行され、そこから泉州へ移送され、さらにそこから陸路で七〜八日間をかけて福建省福州府へ赴き、ここで一年以上滞留する。福州府からは閩江を溯って寧都府に着き、そこからは貢水を下って贛州府に入る。より可能性が高いと思われる広東省經由のルートであるとすれば、贛州府から章水を下って梅嶺山を越え韶州府（現在、韶関市）に入った後、引き続き北江の水運を利用して、北江が西江に合流する三水縣まで下り、西江を西へ航して肇慶府を経由し、両広総督の駐在する梧州府に立ち寄った後、桂江を北へ溯って奇勝で知られる桂林府に到った、というものである。（ペレイラがこの地の絶景についてほとんど何もふれていないのはかなり不可解であるが）広西省に入ったポルトガル人とその連れの奴隸たちは、小さな集団に分けられ省内のさまざまな町に留められたが、その間、多額の心づけを貰ったシナ人の手引きが効を奏してマカオ西南の上川島（フランシスコ・ザビエル終焉の地）で通商を行なっていたポルトガル人と連絡がとれるにいたり、多くの者が配流先からの脱出に成功した。このような幸運な虜囚のひとりこそわがガレオテ・ペレイラに他ならない。彼の上川島到着はフランシスコ・ザビエル逝去の時期とほぼ重なっているはずで、一五五三年二月二七日、ザビエルの遺骸が掘り出される際の立会人のひとりとなっている。その後はインドに戻り、ダマンの守備隊長を務めた。ブラガ大司教秘書の娘であった妻フィリパ・パチェコ Philippa Pacheco との間に一子マヌエル Manuel を儲けたが、この子供には先立たれている。

南シナにおける自らの幽囚生活を振り返ったガレオテ・ペレイラの自筆原稿は現存していないものの、新旧二種の写本が伝わっている。ひとつはローマ・イエズス会文書館に保存され^⑥、いまひとつはリスボンのアジュダ図書館が所蔵する^⑦。前者については、ゴアのコレジオで下働きをしているインド人の少年修練士によって一五六一年の末、一時間的な余裕なしに「(por não aver tempo)」「拙く謄写された」(mai traslado)のものであることを、この写本に裏書きを行なったルイス・フロイス Luis Frois, S. J. は伝える。この写本はイエズス会年報の附録としてローマのイエズス会本部へ送付され、一五六二年に受領された。後者については、拙訳のテキストとして用いた二種の校訂本^⑧はいずれもイエズス会文書館蔵の写本からの翻字を行なっている。両者の間に散見される語彙の綴り等における微細な食い違いについては、訳文の論旨に重大な影響が及ぶものではないけれど、念のため訳註において指摘しておいた。上述のようにペレイラの手記は匆忙のうちに訓練にも乏しい写字生によって謄写されたため、現存する写本には、解釈不能の文章や明らかな文法違反がしばしば現われる。（その責は部分的にはペレイラ自身にもあるであろうが。）リチャード・ウィルスの英訳に基づきつつそれを改善したボクサーの英訳を参照してみると、それらに対応する訳文は、案の定、省略されたり要約されたりしているケースが多い。それゆえ和訳の試みも次善を期すのが精一杯ではあるものの、ペレイラの伝えんとしたことを筆者なりに忖度し曲がりなりにも達意の文章で表現するよう努めてみた。とはいえクルスが原著を著わすに際して挙げた第一の出典であるだけに、記述の全般的な正確さと信頼性の高さにおいて、さらに自ら実見したものと伝聞したことを峻別する誠実さにおいて、ペレイラの手記が優れたものであるという事実は動かない^⑨。

(4) 陳舜臣著『中国の歴史』コンパクト版、第六巻、平凡社、一九八六年、一四九〜一五二ページ参照。劉岸偉著『明末の文人 李卓吾——中国にとつて思想とは何か』中公新書、一九九四年、一七〜二二ページ参照。

Tempo por todo ali ad Ruas veí de do fe tudo .- Carne de vaca e de porco
e peixe fresco eortalica e arreyte e vinegar e farinha feijoa da
e a Roz e finalmente tudo de maneyra que e fuyada a casa Tervidores
por lo tudo forçadas e seade uiv pelle porta equatos mercadones
Janella amajor parte e anos a Rabalides por lo como estas cydades
como ya tento dito todas as noites forçadas os mercadones por
forzare suas forçadas forçados mais forçados ditro -
Por lo vines de Rio eua maneyra de casa q mepareco to rinas
passar te na estreva e seua eua da e q tabi me fazias gas tar
e o tempo au longo de se Rio odirey. Aquite e el Rey nos mais
Destes Rios muytas barcas suas Creas de Covos maneyras
qnae e erias ali ditro e morre Embuar Capoyras. os quaes
te Reora da Roz me servado emes Taio. Atquaes bar
cas de Covos da e Rij as o vandes a cada duos ou tres ou
quatro ou as q quer daltres pescave e pescaõ desta maneyra
as ovas de pescar ayntaõ se toda e as barcas e faz e de se
suavos e as ovas e alta e como ja jera aquillo os Covos
ventas asfirmados e eua a camo pelleo passos ue atar de baxo
Das azas falias todos de barcas o daõ a sus e barcas outros
e fima niqua vi coisa tanto pavaer. os quaes Com se os
a ce foros Creos e Conreca Cadatu o seu barquis onde se fua de
De seyar e tor nas luo a pescar mais ate lo tomaõ os quaes
quere se achas peixe e o vande taze no atravesado no bico e to
mas desta maneyra infiridade de peixe e e de pois lo acaba o
De pescar tivãte os a femos e pescaõ e pouco por de se e a vey
nis ta terra onde emes falia atõuas vinte barcas os quaes eua
vendo os mais dos Dias na pãtia fa rtarmede os eiv por se
das ou maneyra e no uacua de lca

図1 「シナ幽囚記」アジュダ写本。「鵜飼い」の項（白杵市立図書館蔵のマイクロフィルムより）

- (5) Raymond Dawson, *The Chinese Chameleon. A Analysis of European Conception of Chinese Civilization*, Oxford, 1967, p.30. 田中庄善・三石善吉・末永国明共訳『ヨーロッパの中国文明観』大修館書店、一九七一年、五〇ページ。
- (6) Archivum Romanum Societatis Iesu, *Japonica-Sinica*, 123, fls. 214 r - 226 r.
- (7) Biblioteca da Ajuda, *Jesuitas na Ásia*, cod. 49-IV-50, fls. 388-399 v.
- (8) C. R. Boxer, "A Portuguese Account of South China in 1549-1552", in *Archivum Historicum Societatis Iesu*, Vol. XXII, Roma, 1953, pp. 57-92; Raffaella D'Intino (ed.), *Enformação das cousas da China. Textos do Século XVI*, Lisboa, Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 1989, pp. 97-129.
- (9) カレオネ・ペレirosの略号およびその記録の書誌的考察について、C. R. Boxer, "A Portuguese Account of South China in 1549-1552", in *Archivum Historicum Societatis Iesu*, Vol. XXII, Roma, 1953, pp. 57-62; C. R. Boxer, *South China in the Sixteenth Century. Being the narratives of Galeote Pereira, Fr. Gaspar da Cruz, O. P., Fr. Martin de Rada, O. E. S. A. (1550-1575)*, London, 1953 (Works issued by the Hakluyt Society, Second Series No. CVI), pp. I-lviii に全面的に依拠した。

翻訳

凡例

一 現代ポルトガル語における ch の発音は [ʃ]、cha, chi, chu, che, cho をそれぞれ近似音「シャ」「シ」「シユ」「シエ」「シヨ」と発音するが、一六世紀にはこれは [tʃ] で、それぞれ近似音「チャ」「チ」「チュ」「チェ」「チョ」と発音されていたことが確実であるため、拙訳では [tʃ] を含む語彙をそのように表記する。

二 したがって China は近似音にして「チナ」とか「チイナ」とか発音されたはずであるが、簡潔を尊んで前者を採用する。ただし訳者解題においては「シナ」を用いた。ヨーロッパ人によって書かれたシナ見聞記

を和訳しようとする場合「China」を「中国」と統一的に訳すと解釈上(たとえばシナの国名の起源を論じた個所などにおいて)の不都合がたびたび生ずる。拙訳では China を当時の近似音でそのまま片仮名表記したものと理解されたいが、東洋史家榎一雄のように、中国人自身の自称にすぎない「中国」を外国人が無闇に用いることはかえって無礼であり、外国人としての日本人が「中国」を指す時は、他の外国人が必ずそうしているとおりに、他称である「支那」を常に用いるのがむしろ礼儀に叶うと強く主張する人物もいる(『ヨーロッパとアジア』大東出版社〔大東名著選2〕、一九八三年、三一九〜三二四ページ参照)。

三 やや長い註はほぼ各パラグラフの終わりに、短い註は「」の中に入れ、本文よりも小さな八ポイント活字で印刷した。

四 原文にはないゴチックの小見出しは訳者が付したものである。

イエズス・マリア

かの地にて囚われの身となりしポルトガル人らを介して知られしチナに関する若干の事ども、ならびに真実のすべて。これはかの地にて数年間囚われびととなり、真実生ぜし一切のことを実見せるフィダルゴであり、信頼性いとも高きガリオテ・ペレイラなる人物が著わせし一論考より抽出せるものなり

明代の諸省

まず最初に、このチナの地は一三の省 (treze provincias) に分割されている。それぞれの省はその昔、互いに別々の王国であった。しかしずっと以前よりこの方、全土はただひとつの国王のものである。フォキエン Fojien (福建) は、我らの苦難が始まったところであり、その地について我らが知るにいたったことは相当なものである。で、まず、この省について述べるとしよう。この省には当フチエオ Fucheo (福州) 市がある。これはフォキエンの統轄下にある主要都市だ。さらにその他にもたいそ

う大きな七つの市がある。それらの中にチンチェオ Chintcho 市⁽⁹⁾が含まれる。ポルトガル人はこの市について他の市にも増して豊かな情報と知識とを有する。その下にあるひとつの港へ交易のために彼らが渡来して多年にわたるからだ。さらに別にカンタン(Cantao)〔広東〕なる省があり、この省には別に七つの市がある。この省は最大の諸省のひとつであるわけではないが、国王はこれに大いなる配慮を払う。チナの中ではマラクア Malagua に最も近くポルトガル人が最初にそれについての情報を得た土地であるので、我々はこの省については他の省にも増して豊かな情報と知識とを有する。チェゲマ Cheguena(浙江)と呼ばれる別の省がある。その首邑はオンチョン Ocho(杭州)市だ。リアンポ Liampo〔寧波〕市はここに含まれる。市の数は総計で一三か一四である。町や村にいたっては数えきれないほどなので、ふれない。シユティアンフ Xutianfu〔順天府〕と呼ばれる別の省がある⁽¹⁰⁾。その首邑は偉大なるパチン Pa-chin〔北京〕市であり、そこに国王が常に住む。パチン市にはこれに從属する一五の極めて大きな市が別にある。村や町については、そのすべてが数多のしかも立派な壁や濠に囲まれてはいるものの、数えきれないという既述の理由によってふれない。チェリン Chelin〔直隸〕と呼ばれる別の省があり⁽¹¹⁾、その首邑は偉大なるナンキン Nankin〔南京〕市である。ここには昔、チナ歴代の諸王が居を定めていた。本省およびチェキアン Cheqian〔浙江〕省から他の諸省へ徐々に支配の手が広げられてゆき、やがて全土が完全に統一国家となったが、そのようになってから多年を閲しているのので、ナンキン市はその統轄下にきわめて大きな一五の市を別に有する。

キアンシ Quiansi〔江西〕と呼ばれる別の省がある。その主要な市であり首邑もまたこの呼び名である。この省ではスリオ Cullio⁽¹²⁾より上であらゆる佳良な陶磁器が作られ、その他の場所やスリオ Cullio(*)より下のいかなるチナの都市においても陶磁器が作られることはない。このキアンシ Quiansi 市〔明らかに南昌府を指す〕はチンチェオよりもリアンポに近く、しかもカンタンには近くないので、常に大量のしかも廉価な陶磁器があるのはリアンポにおいてである。これまでポルトガル人は

この地方についてきわめて僅かしか知るところがなかったので、何年もの間、陶磁器はリアンポにおいて作られているものと彼らは考えかつその主張していた。しかしこれは真実ではない。このキアンシ市にはその統轄に属する一二の市が別にある。キチオ Quichio〔貴州〕と呼ばれる別の省があり、この省はその下に六つの市を有する。クアンシ Quasi〔広西〕と呼ばれる別の省があり、この省はその下およびその統轄下に一五の市を有する。コンフ Cou⁽¹³⁾と呼ばれる別の省がある。その統轄下にある市の数を私は知ることができなかった。ウルナン Ura〔雲南か河南かであろう〕と呼ばれる別の省がある。シチュアン Sichua〔四川〕と呼ばれる別の省がある。別にも省はあるが、その呼び名やそこに幾つの市があるのかは知ることができなかった。

(10) ポルトガル人著述者によってチンチェオの呼び名が用いられる場合、廈門(アモイ)湾の北にある泉州を指す場合と、同湾の西にある漳州を指す場合がある。最も広義における廈門(アモイ)湾一帯がここで用いられるチンチェオである。

(11) 誤り。実際は北直隸が正しい。

(12) 誤り。実際は南直隸が正しい。

(13) アジュダ本では Cilio。このスリオ(クリオ)とはどこのことか不明であるが、陶磁器についての言及があるところから景德鎮と何らかの関係があるか。

(14) 明代のいかなる省を指すのか比定不能。

秀でた統治機構

結局のところチナには一三の省がある⁽¹⁴⁾。まったくの真実として言えるのだが、これらの諸省にして大きなものであればそのひとつひとつが堂々たる一国の大きさに匹敵する。それぞれの省にはポンチャシ Pon-chasi〔布政使〕とアンチャシ Anchasis〔按察使〕がいる。首邑以外の諸市のすべての案件は彼らのもとへ届く。すでに述べたように、それぞれの省には一名のトゥタン Tutao〔都堂〕があり、これは総督である。同様

に一省にひとりずつチャエン(Cham〔寮院〕)があり、これは裁判権を有する糾問官である。チャエンの職務とするところは、各省を経めぐり訪ねまわって大掛かりな裁判を催すことに尽きる。このような方法でチナは万事がきつちりと運営されており、全世界に存在しうるいかなる所よりもこの国はより良く統治されていると、真実言うことができる。

(15) 明代は一五省であり、ペレイラの列挙から漏れたのは、山東・山西・陝西・湖広の各省と、雲南・河南のいずれかである。

国王の情報収集法

国王は常にこの偉大なるパキン市に居を定めている。パキン市は、私の知ったところによると、この国の呼び名であるということだ。この国は巨大であるので、海辺から宮廷までを行き来するのに五カ月以下ではとても足りない。駅遞を用いることが必要なほど重大な事件が生じた時は、三カ月で行き来する。この国の駅遞に用いられるのは小ぶりの馬であるが、きわめて優秀にして健脚である。このチナの土地には河川が四通八達しているの、ある都市から別の都市への移動は河川によって行なう。この水路の大半はいとも軽快なパロ(16)による。この国はすでに述べたように巨大であるにもかかわらず、国王は見事な措置を講じている。すなわち、月の満ち欠けのたびに、つまり彼らの一月ごとに、国王は一切の報告を得、国中の出来事なり事件なりに知悉するのである。かようなことを可能ならしめる方法と規則とは次のとおりだ。全国はもろもろの省に分割されている。それぞれの省には首邑であるところの市(省城)がひとつあり、そこへ他のもろもろの市の案件がすべて報告される。もろもろの町や村の案件についても同様の措置が執られる。こうした主要なる都市において、月の満ち欠けのたびに一冊の報告書が作成され、これが宮廷へ送付される。右のことは首邑であるところの一三都市すべてについて言えることである。たとえある月のことについて記した通信が旅程の大変な長さゆえに月遅れに宮廷へ到着したとしても、一三の通信が月に一度揃わぬということはない。もしある通信の到着が新月の数日

前であれば、これらの文書の捧呈は行なわれない。その際は新月の日となるまでその捧呈を見合わせる。月遅れで宮廷へ到着した文書については、その日に捧呈する準備だけを整えておく。そして国王による披見が済むと再び駅遞が全省へ向けて送られる。このような方法で国王は自分の国の報告を毎月のように手にするのである。

(16) 原綴り *Paro*、戦争や、商品の輸送に用いる小さな舟艇で、ヨーロッパ人の著述者がガレオタもしくはフスタとに対比したもの。ドラヴィダ語を起源とし、マレー半島の諸言語に *parahu* もしくは *parau* の語形が入った。
R. Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, Vol. II, New Delhi / Madras, Asian Educational Services, 1988, pp. 170-172)。

人口の稠密さ

チンチェオ市(ここでは泉州府)に着くまでに我らの一行は多くの村々を通過し、それらの幾つかは極度に大きい。この国は海沿いにおいてたいそう人口稠密であり、半レゴアも歩けば必ず町なり村なり雑貨屋なりに出遭うのである。これらの雑貨屋にはあらゆる必需品がいたって潤沢に備えてある。道路はまったく人々で溢れており、とても人間などいそうもないと思われる松の木の大勢の子供たちが出てきたものだ。村の外れに住んでいる人々は一見したところ大変貧しいようであるが、他方、市や町の連中は総じてたいそう身綺麗にしている。

橋

数えきれないほどのこれらの村々を出ると、たいそう人口の多いふたつの市を通過する。チンチェオ市に到着後振り返ってみても、これらの三つの市のいずれが最大であるか、俄かには決することができない。いずれもよそのどこにも見られぬほどに素晴らしく、立派な壁に囲まれた都市なのである。それぞれの市の入口に橋がひとつある。その大きさといいづつりとした質感といい、これほどのすごい代物を私はポルトガルでもそれ以外のところでも見たことがない。ある橋には四〇のアーチ

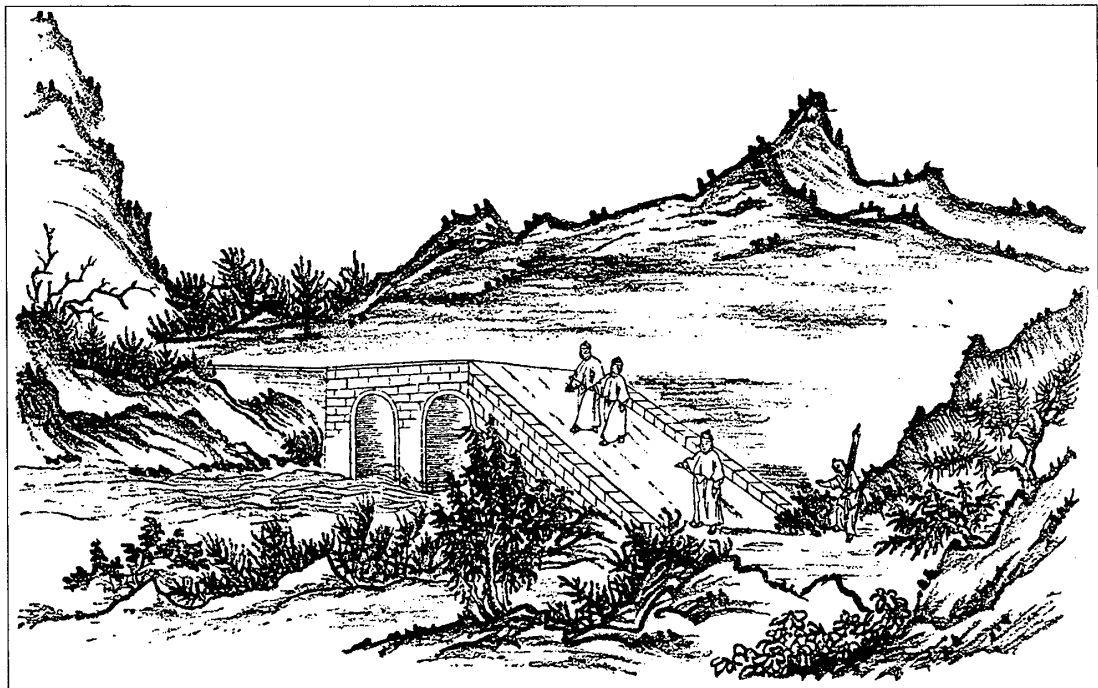


図2 橋 (Justus Doolittle, *Social Life of the Chinese* より)

がある、と連れ合いのひとりが言うのを聞いたことがある。こうした橋をこれほど巨大に造るわけはこうである。この地は海沿いにはたいそう平坦であり、潮が橋に迫ると、ついには橋が冠水してしまう恐れがあるため、橋の長さは極度に長くしておく必要があるのだ。長大な橋ではあるが、その幅はその長さと同く釣り合いがとれている。中ほどが両端に比べてより高くなっているわけではないため、こちら側からあちら側を遠望できる。つまり橋の入口に立つと、一望のもとに橋の全貌を見渡せるわけだ。両側の欄干は想像で描かれたローマ風の図柄を見事に彫り込んだもので、その新奇な様子と様式には、大いに胆を潰さずにはいらなかった。それにしても、橋に使われている石材の大きさと並んで、我らを最高に驚かせたものは、すでに述べた、それぞれの都市の入口にある橋である。我らは多くの橋を通過したが、それらはたとえ無住の地に造られてはいても、街中の通りにあるのと同じ大きさなのである。旅行者以外の眼には全然ふれないのだから、不要にして規律のない出費だと思われるものである。これらの橋は我らにおけるアーチ橋とは異なり、橋脚から橋脚までを幾つもの巨大にして長い石で締め付け、これだけでも充分であると思われるのに、アーチをこうして締め付けた後、橋には全面的に平石で舗装が施されるのである。こうした橋の造作はそれ自体限りなく秀逸であるが、なかならずアーチを締め付けるのと、橋を舗装するのに用いられるこれらの石の巨大さには言葉を失う。なにしろそれぞれの石は長さにして控え目な歩幅で一歩半、多くの石は非常に大きな歩幅で一二歩を超えていたのであるから。

道路

道路の様子であるが、それらはきわめて規則正しく切り出された切石によって舗装され、場所によっては石の不足のため煉瓦が敷かれている。このフチエオに達するまでの道中で我らは若干の山並みを通過したが、そうしたところでさえ必要であれば道はつるはしで切り拓かれ、あるところでは平坦な道で見てきたのと同じくらいよく出来た敷石道となっている。こうした事柄を目の当たりにした我らは、世界中にチナ人ほどの

土木の天才はいないと判断したものである。

人糞の利用

この地方はたいそう人口稠密であり、それゆえによく利用されている。したがってそれこそ猫の額ほどの土地さえも耕さずにはおかない。フチエオ市に向かうまでの土地で我らはほとんど家畜を見かけなかった。道中一貫して見たものは僅かに牛だけであり、この牛は農夫たちが自らの耕作のために持っているものだ。彼らはただ一頭の牛を使つて耕作するが、家畜が豊富な他の地方におけると同様、そうするのがこの地方の習慣なのだ。我らが力でやること一切を彼らは技でもつてやるというわけだ。この地方では、人糞が金銭の価値を持つ。我らにはそのことが家畜の糞の不足に由来していると思われたのであるが、そうではない。というのには、チナ全土が上述の代物を利用するからだ。かくして男たちが通りを歩き回り、野菜が欲しい人々のためには野菜と、さもなくば薪と引き換えに人糞を買うのである。これは都市を大いに清潔に保つための良い習慣であり、現に都市はこの種の不潔さから完璧なまでに免れている¹⁷⁾。

(17) 往時のヨーロッパ農業では糞尿を堆肥として利用するのが野菜畑に限られていたため、その処理が円滑に進められず、人口過密のひどくなった一六世紀から一八世紀までのヨーロッパの都市では、夜、建物の階上から便器の内容物を街路へ垂れ流すことが日常的に行なわれた(鯖田豊之著『文明の条件——日本とヨーロッパ』講談社現代新書、一九七二年、七七〜七九ページ参照)。他方、シナでは堆肥として用いるため「糞便はまるで金であるかのように大切にちれ」(Samuel Couling, *The Encyclopaedia Sinica*, Shanghai, 1917, p. 483) だ。一六世紀後半の日本に滞在したルイス・フロイスの『日欧比較論』にも「我らは糞尿を運び去る人にかねを払う。日本ではそれを買う、その代わりに米とかねを与える」とある(Luis Fróis, *Europa-Japão. Um Diálogo Civilizacional no Século XVI*, José Manuel Garcia & Raffaella D'Intino (eds.), Lisboa, CNCDP, 1993, p. 146)。

ただし、シナについていえば、糞尿を堆肥として用いたのは、古来、高温多雨の淮陽山脈以南の稲作地帯に限られていた(三田村泰助著『黄土を拓いた人びと』河出書房新社(生活の世界歴史2)、一九八〇年、六一ページ)。

食肉

極端に多くの鶏や、家鴨・鶩鳥・豚・山羊がいるが、羊はまったくいない。鶏は重さで売り、他のものもすべて同様である。ニアラテル(重量単位)の鶏は二フォンの値段であり、二フォンとは半ヴィンテンだ。家鴨と鶩鳥はこれと同じ値段だが、豚は一フォン半という値段であり、これは七レイスに相当する。牛も僅少であるとはいえ豚並みの値段であるが、しかしフチエオを北方に向けて進んでゆき内陸地に入つてゆくと、夥しい数の牛がおり値段もぐつと下がる。我らが通過してきたもろもの市にはこうしたものどもの肉がたいそう豊富にあり、例外はすでに述べたように牛だけである。異教徒が鶏や牛や豚を食わぬというインディアにおいて、それらを食うのはポルトガル人やモウロ人(ムスリム)、それに彼らのためにそれらを飼養しているその他の異教徒たちだけだ。もしインディアがそうであるように、この地方にそれらを食う習慣がないのであれば、我らの口に入るものは大方ただ同然の値段となるであろう。しかしチナ人は生来世界最大の肉食漢であり、何でも口にするが、とりわけ豚が好物である。豚は太つていれればいるほど彼らを喜ばすところとなる。豚の値段が上がらないのは、この地方が上述のように非常に豊饒であるからだ。値段の下がることはしばしばでも上がることはない。蛙には鶏と同じ値段がつく。彼らは犬・猫・蟾蛙・鼠・蛇などありとあらゆるものを口にする。

ロウテア

私はこれまでロウテア Loutea について話してきたのであるから、ロウテアとはいかなる意味なのかを述べるとしよう。これは我らの間でいうセニョール(御主人様)のようなものだ。誰かが自分の召し使いを呼ぶ時、呼ばれた者が我らの間ではセニョールと答えるように、彼らは「ロ

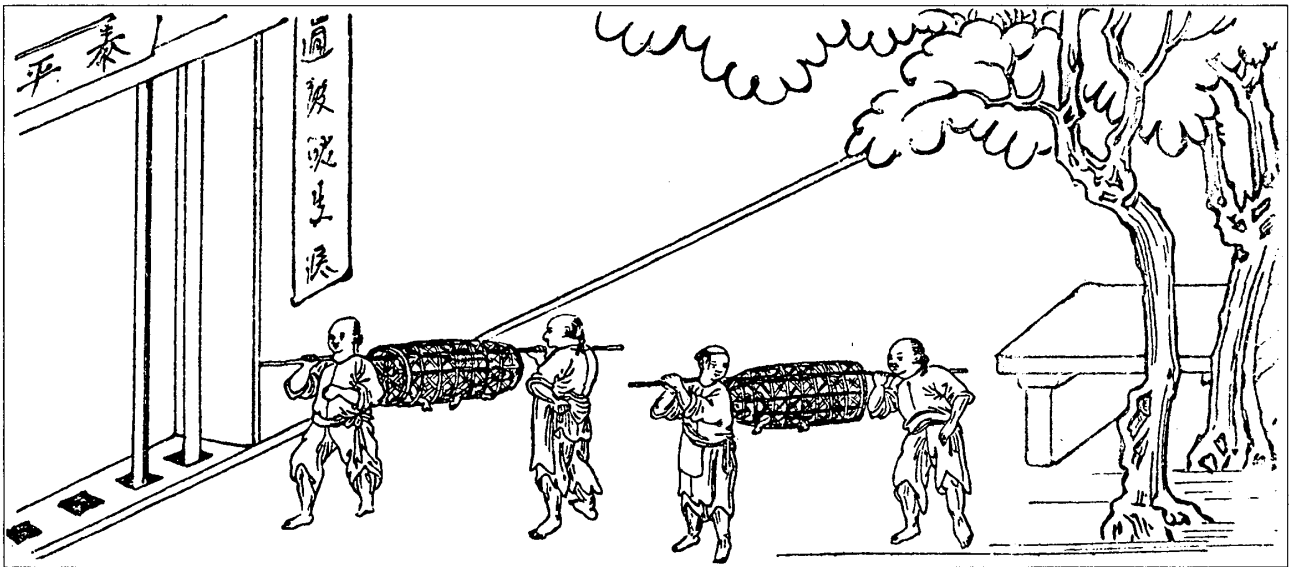


図3 豚を運ぶ (Gray, China より)

ウテア」と答える。我らの間では国王がひとりのフィダルゴを作ると言うのと同じように、彼らの間では国王がひとりのロウテアを作ると言う。このロウテアには名目上も職務上も実にさまざまな身分と位階とがある。そのすべてを完全に報告することはできないので、ここでは幾つかの主立ったものの存在理由を述べるに止める。

ロウテアの称号と名譽とを受ける方法についてであるが、それは、国王の特別な命令によって、普通のとは異なるたいそう幅広い帯一本と、縁なし帽ひとつを与えられることである。どのロウテアもロウテアと呼ばれることは同じでも、それらの間には身分の上で雲泥の相違がある。というのは、裁判に関わる重職をもって国王に仕えるべきロウテアたちが文学の試験によって生まれるのに対して、より下級の職務を果たすべき連中——たとえば海および陸の執達吏、税やその他これに類するものを徴収するための代官がそうである——は引き立てによって生まれるにすぎないからだ。このような下級役人はひとつの市にそれこそ数えきれないほどおり、上級役人の前では跪いて仕える。ただし縁なし帽をかぶることとロウテアを名乗ることは、身分の高下を問わずあらゆるロウテアたちに共通である。



図4 ロウテア (Peter Mundy, *The Travels of Peter Mundy* より)

(18) 中央から派遣されてくる「官」と土地生え抜きの「吏」との違いに言及していると思われる興味深い一節である。明清時代の「官」と「吏」との間には截然とした区別があった。まず官のほうは国家の任命する正式の役人であって、科挙に合格した進士から任用されて任期三年を終えればよそへ転任する。これに対して、吏のほうは国家に任命された身分でもなければ登用資格も要らなかった。彼らは土地生え抜きの連中であり、一族ぐるみで世襲的には中央の本省から下は地方政府にまで寄生し、中央政府から俸給の出る官とは違って、建て前の上では無給であった。土地の事情に精通した吏は実際のな行政・司法の庶務をことごとく処理する上、しかも吏の匙加減ひとつで決められたから、その過程で治下の人民から思いのままに税を取り立てることができた。ただ働きの吏とは、実は人民に巢食って直接その血肉を搾取る機関であったわけである（三田村泰助著『明と清』〔世界の歴史14〕河出書房新社、一九六九年、一四一―一四四ページ参照）。また、明代の官僚の給与は歴代王朝の中で最低であったとされるにもかかわらず、ペレイラがこの後、彼らが「たっぷりと俸給を貰う」ことに言及しているのは、吏の私的な徴税の上前をはねることによって官がいかに私腹を肥やすことができたかに、彼の理解が及ばなかったせいであろう。さらに、太祖洪武帝が一三八〇年に定めた「廻避」の制によって官（ただし文官のみ）は本籍地・出身地への赴任を禁止されたり、官の同一役職在任期間が原則として三年であることを踏まえて、ペレイラはそれらが政治腐敗の防止に効果を発揮するものと称賛しているのであるが、これも土着の吏の弊害にまで彼の観察が及ばなかった証しであろう。

五つの主要官職

この国はすでに述べたように、一三の諸省に分かたれており、それぞれの省にはトゥタン [Tuta] (都堂) と呼ばれる一名の統治者がいる。ただし、ふたつの省にまたがって統治する者も何名かいる。トゥタンは最上級の統治者であるが、その次席に位置するのはチャシン Chacis (察院) と呼ばれる者である。彼らは裁判の管轄権を持つ法官であり、これらの行政区にひとりだけとは限らない。在任期間は一年を超えないが、帯び

る権力はきわめて大きい。トゥタンへの報告はこのチャシンが行なう。諸省の規模はともかく大きいので、主立った市はどの省でも七つを下らず、ある諸省ではそのような市が一五ないし一六に達する。この他ほとんど無数といってよいほどの町と村がある。チャシンの誰であれ、その来訪に際しては怖れられ敬われることおびただしく、そのさまはひとりの偉大な君主が集める畏怖・崇敬もかくやと思われるほどだ。その任期の終わる頃、すべての巡視を済ませたチャシンは、査問を行なうために首邑たる市へ向かう。その査問が終了すると、チャシンは誰がロウテアの位階を取得しようとしているかを知ること係りきりになる。これについては別の箇所において述べよう。これら一三ある諸省のそれぞれには、一名ずつのポチャシン Pochasin (布政使。アジュダ写本では Ponacis) がいる。彼はその省のカピタンであり、国王のもとに入る全収入を司る財務官であるから、常に主立った都市に駐在する。このポチャシンは、諸省の首邑であるもろもろの都市の四つの官邸の中ではもつとも中枢でしかも最大の官邸にいる。彼の主要な業務はカピタンを務めることのほか、財務官としてその省のあらゆる金銭問題を担当することであり、その金銭を一定の時期ごとに宮廷へ送付するのが彼の職務であるものの、非常な重大事が出来た時には、裁判に関わる事柄にも容喙する。第二の官邸には、アンチャシ Anchassi と呼ばれる別のロウテアがいる。これもまた大官であり、裁判に関するあらゆる事柄を任務とする。ポチャシンよりも多少格が落ちるとはいえ、裁判に関する事柄はすべて彼のもとに届くわけであるから、双方の官邸の様子を見比べた者なら、このアンチャシこそ、より格が上であると言わずにはおれないであろう。続いて第三の官邸には、トゥシ Tuci (都司。アジュダ写本では Tuchi) と呼ばれる別のロウテアがいる。これまた大官であり、主に戦争に関する事柄を担当するのが、彼の職務である。この次がタイス Taisi (太守か大尊か。アジュダ写本では Taisi) である。彼は第四の官邸の主であるとともに、市内の中心的牢獄を守るロウテアである。ひとりひとりのタイスは現にそうしているように逮捕と釈放とを行なうのであるが、事例が深刻であったり際立った重要性を持つている場合は、他のロウテアたちの充分な助言

を仰がぬ限りは何も行なわない。

官員の選抜

ロウテアの選抜の仕方について。各省の首邑たると首邑ならざるを問わず、すべての都市において、多くの男たちが国王の費用で学んでいる。彼らは一年の終わりを迎えると首邑たる都市へ出向き、そこでチェシンと会見する。この時期にチャシンもまたそこにやってくるのは、すでに述べたように、このこと（「ロウテアを選抜すること」）に対処するためのみならず牢獄における糾問を行なうためでもある。チャシンたちによる糾問は毎年に行なわれるけれども、重職に就くために選ばれてきた男たちを一堂に集めて試問を行なうことは三年に一度しか行なわれない。試問に應ずる者たちはこの儀式⁽¹⁹⁾のため極端に大きな幾棟かの官舎に入れられ、その中でチャシンおよびロウテアたちの監視を受ける。主立った都市からもそうでない他の都市からも、試問に應ずる者たちはそこへやってきて、多くの事柄について幾度も質問を受ける。もし一切によく答え、学位を受けるにふさわしい能力があるとされれば、ただちにその旨をチャシンが認定する。しかしロウテアが身につける縁なし帽・帯を着用するのは、国王からの批准が届いた後にすぎない。この試問に費やされる時が終わり大いなる儀式のうちに学位が取得されると、一堂は揃って食べかつ飲み、幾日もの間をひたすら宴会の中で過ごす。まったくチナ人の喜びたるや、食べかつ飲むことにとどめをさすのである。このようにしてロウテアは選出されるのであるが、その狙いは、文章を綴ることによって成立する職務において国王が彼らの輔弼を受けることにある。この試問に応じた他の連中にして学位を授かるにふさわしい能力なしとされた場合は、もう一度学び直すよう命ぜられる。もしそれが本人の過失および怠慢によるものであれば、多数の笞打ちを与え、かつ数名の者についてはこれを牢獄に投ずるよう命ずる。この試問が行なわれた年に我らが牢獄にいと、このようにして笞打された連中が多数我らのもとにやってきた。彼らに笞打されたわけを尋ねると、彼らが言うには、幾つかの事柄について質問されたにもかかわらず自分たちに

為された質問に答えられなかったからだというのであった⁽²⁰⁾。

(19) 原語は auto. アジュダ写本では auto. いずれにせよ意味はあまり変わらない。

(20) この記述を一読して明らかかなようにペレイラは科挙をあたかも口頭試問であるかのように描いている。ヨーロッパでは現在もその傾向が強いように口頭試問が伝統的に重視されてきた（平川祐弘著『西洋の衝撃と日本』講談社（人類の文化史6）、一九七四年所収「東西両洋の試験制度——勤勉の伝統と近代化の起動力」五四〜五九ページ参照）ため、こうした誤解が生じたのであろう。ダンテの『神曲』天堂篇第二四歌と第二五歌には、ダンテが聖ピエトロと聖ジャコモから試問を受ける様子が描かれている。「ちよほど学士が、黙々と教授の質問を待ちながら、結論を引き出すためなく、／反論のための心積りをするように、／私は、相手が話している間から、あらゆる理屈を並べて心支度をした、／この種の審査でこの種の試験官に即答するための用意だった。」

ロウテアの威厳

これらロウテアたちに対する奉仕ぶりはまことに一見に値する。彼らはひどく畏怖されており、聴聞の場にいる時など、ひとりのロウテアが一声叫ぶと、裁判に関わる下僚どもは上になり下になりながらばたばたと狼狽を極める。どこへ行つてよいかも分からず何をしてよいかも分からぬという体たらくである。かくてロウテアたちは公式の場にいる時、たとえ僅かに扉まで自分の身体を動かすことを欲しただけでも、全体が金糸で刺繍された輿まで自分を連れてゆかせ、その中で自分を運んでもらわねばならない。用務のために外出する時や、お互いの邸を訪ね合う時もまた、彼らは右のようにして運ばれる。伴の者を同行させているが、その数はそれぞれのロウテアの身分によって異なる。たとえどれほど下級のロウテアであれ、そうした輿で行くような連中であれば、前方にふたりの男を先行させていないような者はひとりもない。人々がそこから遠ざかるよう、このふたりの男が前方で叫び声を上げてゆく。しかし



図5 ロウテアの一行（汪廷納『人鏡陽秋』より）

ロウテアたちはいとも畏怖されているので、そうする必要性はほとんどない。彼らは銀もしくは銀めっきした職杖を携えるが、その数は、それぞれのロウテアが有する位階・尊厳に応じて、二本あるいは四本のこともあるし、六本あるいは八本のこともある。もし大身の部類に属するロウテアならば、こうした職杖の前後を秩序正しく、笞に使う竹を手にした刑吏たちが進み、この竹を地面に引き摺ってゆく。かような次第であるから、すべての通りが舗装されていることもあって、連中の叫び声ばかりでなく竹を引き摺る音までが遠くから聞こえる。これらの刑吏たちは自分たちがそうと知られるための徴として、赤い帯を身につけ、縁なし帽には孔雀の羽の飾り物をあしらひ、捕吏^①の役目をも果たす。これらのロウテアたちは自分たちの後ろに一定数の男たちを随え、この連中は竿にぶら下げられ銀の文字が記された長い板を捧持するが、そこにはそのロウテアの名前と学位と高官であることが明記してある。そしてそれぞれの身分に応じたソンプレイロ^②（日傘）を差し掛けさせる。たとえばもし小身のロウテアであれば、ただ一本を差し掛けさせるだけでその色も黄であつてはならない。大身に属するロウテアであれば、二本、三本、四本のソンプレイロを差し掛けさせ、最高位に属するロウテアであれば、黄のソンプレイロを持つことができる。この色は彼らの間では多大の名誉を表わすものとされる。さらに戦争のロウテア〔武官〕であれば、たとえ小身であっても黄のソンプレイロを携えることができる。トゥタンもしくはチャインであれば、これまでに述べたすべての他に、外出に際しては三頭か四頭かの駿馬に前方を歩かせ、多数の武装兵を引き連れてゆく。

(21) 原語 *bistinguns*. アジュダ写本では *bligis*. 正しい綴りでは *beleguns*.

食道楽

これらのロウテアたちはもちろんのことチナの人々は皆、我らの様式と同じ椅子に腰掛け、高い卓子で食事することを習慣とする。しかもたいそう綺麗に。卓子には手巾もナプキンもないのに。すべての食べ物は

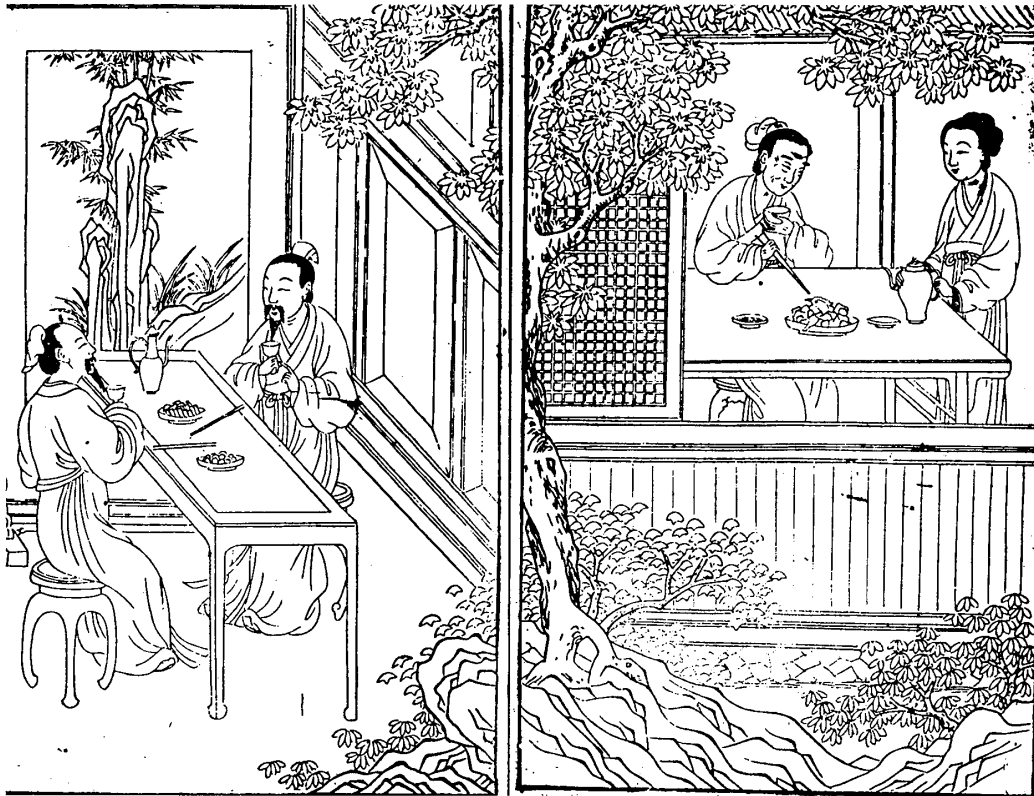


図6 高い卓子での食事（『人鏡陽秋』より）

予め切られて卓子に運ばれるし、我らが匙でもって食べるように、彼らは手でも何にも触れることなく二本の棒（箸）を用いて食べることを習慣とする。それゆえに彼らには手巾なしに済ますことができるのである。彼らは食事に際しても人間同士の付き合いにおいても、礼法という見地からは大変な優美さを具える人々だ。この点、彼らは他のいかなる諸国民も凌ぐように思われるし、同様に立ち居振舞いにおいても彼らの習慣に即して思慮深くこなすのであるから、彼らはあらゆる異教徒やモウロ人に優るし、彼らが我らに嫉妬心を懐くような理由はほとんどないと思われる。大身たちはたいそう見栄っ張りであり、自分たちの纏う衣裳の裏地に最高の絹を用いる。これらのロウテアたちにはいかなる様式の運動も気晴らしもない。彼らの至福はただひとつ食べることに飲むことに尽きる。彼らはときどき野外に出て弓でもって標的を射るよう命ずる。しかしこんな時でもまず食べることと飲むことが先だ。兵士たちが標的を射ている間、彼らは食べている。標的というのは数本の大きな棒に一枚の大きな掛布が縫われたものだ。誰かが標的に命中させると、そこにいる上長の手ずから一片の赤い琥珀織りを受け取り、それを頭に結びつける。標的に命中させた者たちは皆この名誉に与かり、ロウテアたちはといえは満腹になって邸に戻る。

偶像崇拜

彼らチナ人たちは極端なまでの偶像崇拜の徒である。皆が一樣に崇拜するのは天であり、何事につけても我らが「神のみぞ知る」と言うように、彼らは「ティエン・ジャウテエ」[Tien jautee「天曉得」と言う。これは「天のみぞ知る」を意味する。太陽の崇拜者もいるし、月の崇拜者もいる。このようにひとりひとりが己の気持ちに叶うものを崇拜するのであって、無理やりに何らかの崇拜対象を押しつけられることは何人にも絶対がない。彼らのメアン meāos（廟）すなわち寺院には大きな祭壇がひとつあり、位置こそ我らの祭壇と同じであるが、その周囲をぐるりと歩けるところが異なる。さらに、その土地で何か目覚ましい事績を残してその崇敬を一身に集めているロウテアの大きな像があり、そのすぐ右

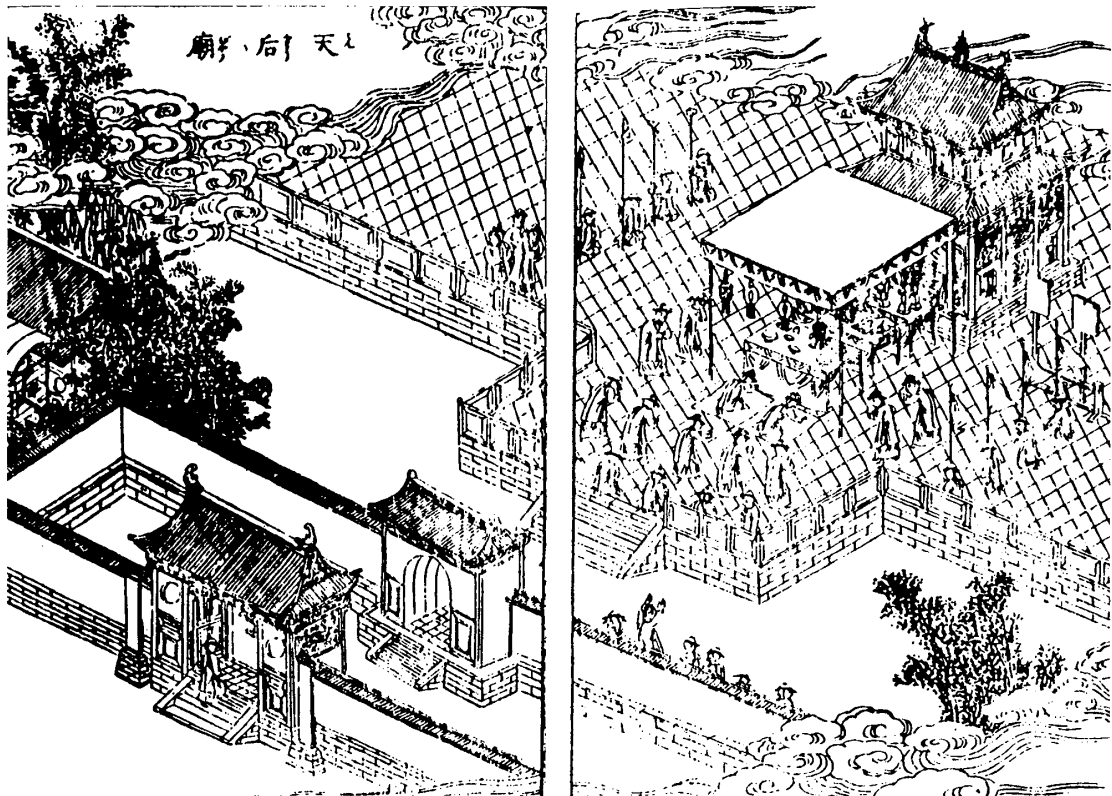


図7 天后廟（中川忠英『清俗紀聞』より）

手には我らが描くのよりはずつと醜悪な悪魔の像がある。この悪魔に対してもここに入ってくる連中は何かを質問し籤を引き、かつ大仰な拝礼^②を行なう。彼らは悪魔について、これは悪い奴で災厄をもたらすことができるのだ、と言う。もし彼らに向かつて、死につつある人間の靈魂は何になると考えますかと質問すると、彼らは、靈魂は不滅であり、現世においてよく生きた人間ならば死後ただちに悪魔（鬼）となるが、悪い生き方をした者ならば他ならぬ悪魔によって水牛や羊や犬やそれ以外のこれに類するものに変えられてしまうのだ、と答える。そして生まれ変わる時は獣のようにではなく悪魔のように変えて欲しいという、まさにその一心から我らは悪魔を褒め称え、かつこれに尽くすのだ、と彼らは言う。

(22) 原語 *sumbaia*、マレー語の *sembahyang* に由来し、「国王や由々しき身分の人に行なう敬意を込めた挨拶」(S. R. Dalgado, *Glossario Lusó-Asiático*, II, p. 326)。

別の様式の寺院があつて、その中では祭壇にも周囲のすべての壁にもたくさんのお偶像があり、どの偶像もよく均整がとれており禿げ頭だ。これを彼らはオミトフォン *Omiñofom* (阿弥陀仏) と呼ぶ。これについて彼らの言うところによれば、これもまた悪魔ではあるが天上におり善も為さず悪も為さず、現世において純潔を守つて生き、僅かに米と野菜を口にするだけで肉や魚は決して食べなかつた男および女の化身であるということだ。このオミトフォンの偶像に対する顧慮は極めて僅かであるのに、悪魔に対するそれは大きい。彼らはまたこうも言う。もしひとりの人間が現世において立派に振る舞うならば、天はその人間に地上的な財産をたつぷりと与える。もし悪く振る舞うならば、疫病・病弱・労苦・貧困が天からもたらされる、と。右のことを彼らはデウスの認識もないままに信じている。結局のところ彼らは死ぬことと生きることに、これ以外には何もなす連中だ。しかし道理には服従するところから、たとえあまり満足すべきものではないにせよ、我らが通訳を介して語つた

ことはなんであれ彼らに好印象を残し、かつ我らの祈りのほうがずっと優れているようであると彼らには思われた。ゆえに疑いもなく、彼らの内には真理への認識を刻印するにはまことにもつてこの素養があるように思われるのである。願わくはわが主よ、その無限のご慈悲により、右のことがいつの日か実現を見ますよう、この国の如き巨大な代物が加護なきまま滅びに至りませぬよう、諸事取り計らい給わんことを。

改宗の見通し

彼らには我らの祈りがいと好ましいものと思われたから、我らは牢獄の中で多くの連中から天のことについて書いて欲しいとしつこくせがまれた。我らはこの様子を見、幾つかの道理についてはうまい説明ができなかつたけれど、ともかく彼らの欲求を満たしてやった。自分たちの偶像崇拜に耽る間、自分たちの行為をあざ笑っているのは誰でもない彼ら自身だ。そこで我らは次のように言つてよいと思う。もしこの国がいつの日か我らと連繫するにいたればこの国の全面改宗はほとんど苦もなく行なわれるであろうと。このためにはある種の障害が立ちふさがるかもしれないが、最大の不都合はソドミア（男色）の罪である。この罪は下層民の間に広く行き渡っており大身たちの間でもあまり非難されない。もしこの障害をなくすことができれば、後は容易である。有能な通訳をひとり伴いさえすればきわめて短時日のうちに多大の成果を挙げうるであろうが、しかし上述のとおり、この国が我らと緊密に連繫しているという条件がなくてはならぬ。

祝宴

ロウテアたちもその他の人々も新月と満月の日に祝宴を催す習わしであり、盛大な宴会を行ないながらお互いのもとを訪問し合う。なぜならすでに述べたように、彼らの愉悦はこの期に及んで頂点に達するからだ。しかし人によっては相互訪問を行なうよりもむしろ自分の長上に拝礼をしにゆき、長上はメアン（廟）に赴く。しかる後に数日間を自分たちの楽しみごとのために費やす。同じようにそれぞれの誕生日にも大いなる祝

宴を催し、誰かが自分の誕生日のために祝宴を行なう時は、その親戚や友人やらが彼に与えるべき多少の品々なり現金なりを持参して参集する習わしである。そして参集してくれた皆に対して食べ物と飲み物とを振る舞う。同じように彼らの国王の誕生日に際しても国を挙げて大いなる宴会のうちに皆がこれを祝う。しかし彼らの間で行なわれる主要にして最大のお祝いは、彼らの一年の元旦（太陰暦）であり、この日は二月の新月の初日（太陽暦）に当たる。クリスト生誕までの哲学者たちが往昔そう数えていたように、彼らの一年とは三月から三月までである。また、彼らの時代はその国王の治世に支配されているために、ある公式文書を作成する時は、これこれの国王の治世何年、某月の某日という日付を記しておく。古い公式文書にも、これこれの国王——それぞれその呼び名でもって呼ばれる——の治世の何年と記してある。

廻避の制度

ではこれから、チナ人が裁判を催すに際して守っている様式と形態とについて述べよう。その狙いは、異教徒でありながら彼らがこの点で我らクリスト教徒よりも優れていること、真実にして実直な行動に縛られる点では彼らこそ我ら以上であることを知ってもらうことにある。チナ国王は常に偉大なパチン（北京）市にいる。この国は巨大であり、すでに述べたように全土がもろもろの省に分かたれており、これらの省がコンスル consules（古代ローマ帝国の執政官）のように総督と地方官とによって統治されている。彼らは頻繁に配属と転任とを強いられるので、悪事を企むための時間などほとんどない。さらに、自分たちの国全体をより安全堅固に保つために、ある省へ政務を執りにゆくべきロウテアはずっと遠くの別の省の出身者でなければならない。出身の省に彼らは妻妾や子供たち、あらん限りの持ち物を残しており、政務を執る任地に持参するものはいえ、己の身ひとつだけである。しかし任地に着くや否や、邸であろうとその飾りつけであろうと、また身の回りの世話をする連中であろうと自分に必要なものは一切あてがわれる。その点は申し分なく完璧であり不自由もないから、彼らには何かを持参してくる必要など全

然らない。このように国王は良き奉仕を受けているばかりか、謀叛の懸念からまったく免れている。

嚴罰主義

各省の首邑であるこれらの都市のそれぞれには、四名の主要なロウテアがいる。彼らのもとへ、その都市の直轄下にある他のすべての都市の案件が届けられる。省全体の案件についても同じである。その他にも多くのロウテアがあり、この連中は、裁判に関する諸事を担当する者であれ税金収納に関わる者であれ、業務報告を右の大官たちに対して行なう。さらに悪事が行なわれぬように、またロウテアのひとりひとりとその本分を尽くしているかどうか、町全体に眼を光らせる。このような次第であるから、おしなべて捕縛や笞打ちや拷問に手を染めない者はいない。こうしたことは彼らの間では処罰としていとも普通に行なわれており、処罰を与えることもそれを受けることも不名誉とは見なされないのである。

これらのロウテアたちは泥棒を捕らえることに多大の配慮を払う。ゆえに市や町や村の中で泥棒が逃げおおせることは滅多にない。たとえ海に浮かんだとしても海岸沿いのところで多くは捕まってしまう。彼らはいたいそう酷く笞打された後、規定の衣服を身につけさせられた上で牢獄に放り込まれる。そこで飢えや寒さのためにごく短時日のうちに全員が死ぬ。我らが虜囚となつてゐる期間こうした連中のうち六〇人以上が死ぬのを目撃したような気がする。もし誰かが食うための手立てを得るべく逃亡を図つたとしても、その者はやがて有罪者の一群に放り込まれるのがおちである。この先に述べるように彼らには国王が食べるものを与える。

これらの連中を笞打つ道具は、真ん中で割つた竹の断片であり、あれ（囚人を酷く笞打つこと）のためにはびつたりのだ物だ。鋭く尖つてはおらずぐんぐりとしているが、これを用いた笞打ちを腿、否、ひかがみに向けて行なう。受刑者をひとりずつ地面に（うつ伏せに）寝かせ両手で笞を振り上げ思い切りこれを振り下ろすのであるが、その残酷さに見る者

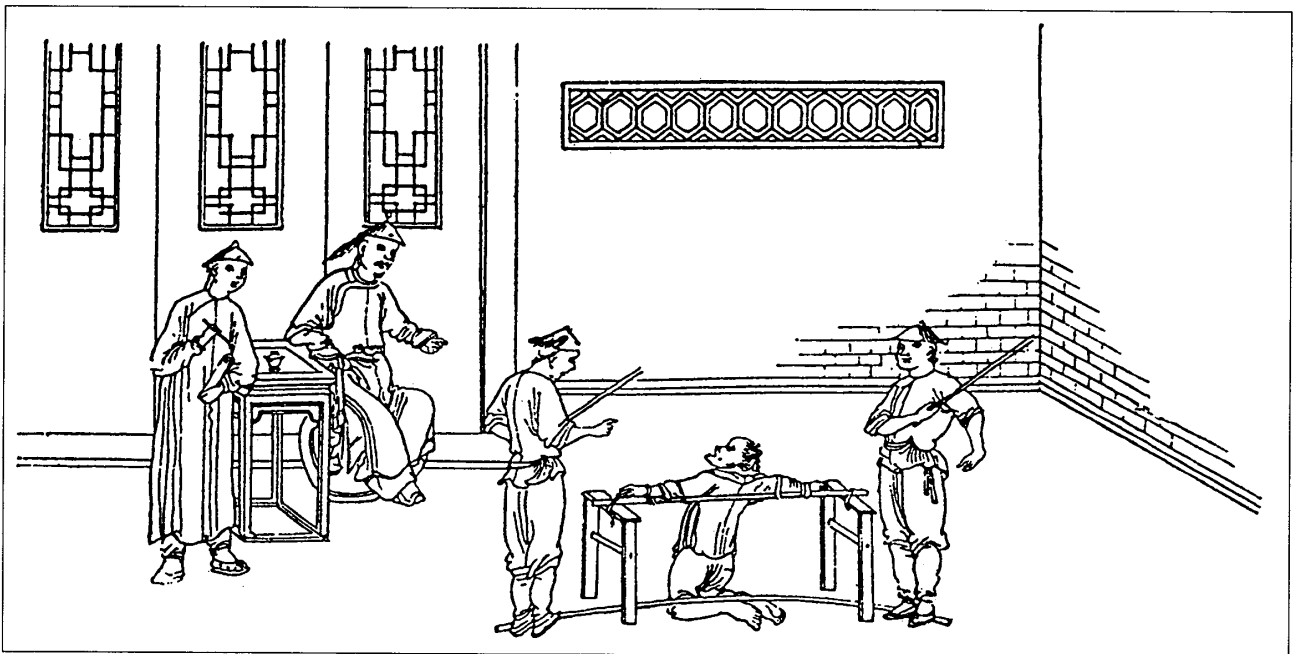


図8 清代の拷問 (Gray, China より)

は胆を潰す。一〇回の答打ちで多量の血が吹き出し、二〇回または三〇回になるとひかがみの組織はことごとく寸断される。五〇回または六〇回に至ると治療に長期間を要することになる。もし一〇〇回もやられたら治療の施しようはなく、ただ死ぬだけである。右のことは、答打ちを与える刑吏たちへ袖の下を渡してやるだけの手立てがない連中にのみ行なわれる⁽²³⁾。

(23) 原文 *Isto se são dados a quem não tem que peite a estes algozes que os dão. アジユダ写本には Isto so são dados (.....) とあって明らかにこちらが正しい。*

公開の場における尋問

これらのロウテアたちは、我らには極めて好ましいと思われたのであるが、次のような一事を守っている。すなわち、ある人物が自分たちの前に連れてこられ、これに幾つかの尋問を行なうことになった時、たとえその一件がどれほど重大なものであっても、これに対する尋問は、それぞれのロウテアが自分の邸に有するかの大講堂において公然と行なわれるのである。我らに対する取り扱ひもこのような様式であつたし、このやり方であれば、我らのもとで日々起るあの偽証など生じようはずはない。多くの者が心なき書記の恣意によつて自らの生命・財産・名誉を失う危険にしばしば晒されるのも、偽証のせいに他ならぬ。

モウロ人（イスラム教徒）も異教徒もユデウ（ユダヤ）人もそれぞれが自分たちの宣誓方法を持っている。モウロ人はモサフオ⁽²⁴⁾にかけて、ブラメネ（バラモン教徒）は燃り糸にかけて⁽²⁵⁾、ユデウ人はトウラ⁽²⁶⁾にかけて、それぞれ宣誓する。同様に、その他すべての異教徒もそれぞれが崇拜するものにかけて宣誓する。これらチナ人もまた天や月、太陽や自分たちの偶像にかけて宣誓しはするものの、法廷ではいかなる様式の宣誓も全然行なわない。ある者が何らかの犯罪のために捕らわれその証拠が薄弱な場合であっても、彼はただちに拷問にかけられる。また当事者として出廷した証人たちに対しても、真実を述べようとしなかつたり

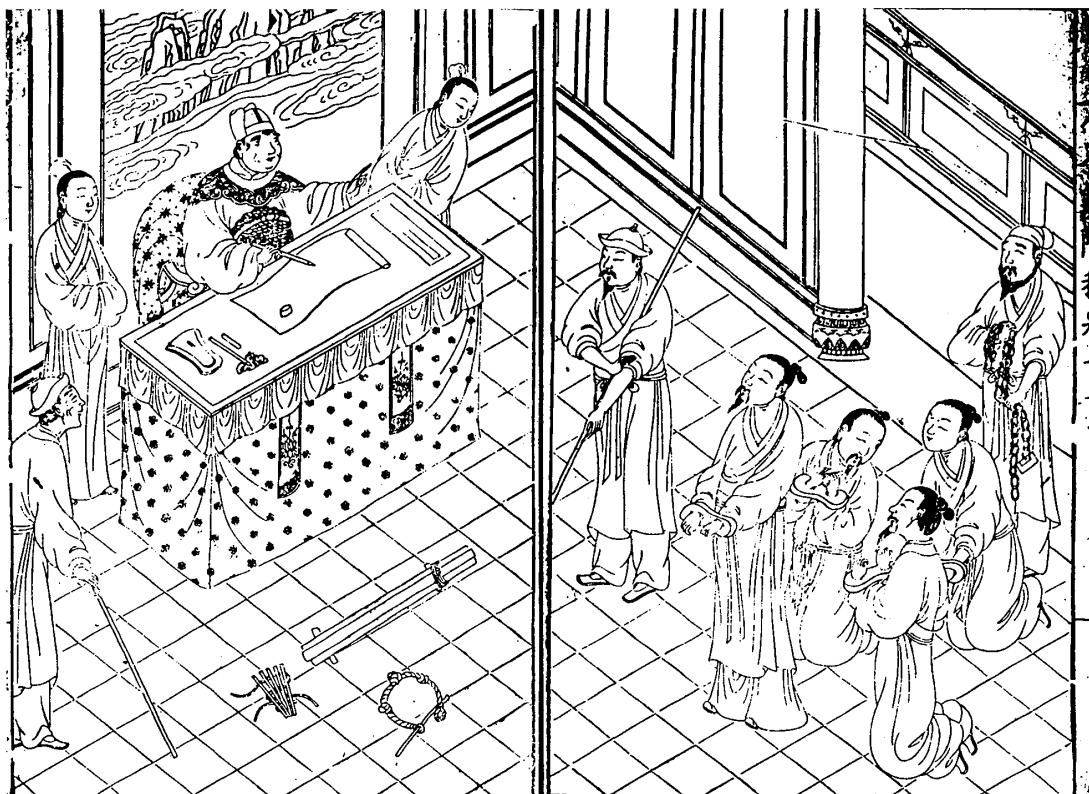


図9 裁判にのぞむ明代の官員（『人鏡陽秋』より）



図10 裁判を行なうロウテア (The Travels of Peter Mundy より)

何らかの点で証言に食い違いが出たような場合には同じことが行なわれる。私は証人たちにも笞打ちを加えると述べたが、尊敬に値し信用のある人物は別である。こうした者たちには信用を与えるくせに、名譽のないその他の連中には拷問や笞打ちの力を借りて真実を吐くよう強いるのである。証人たちを公開の場で尋問することについてであるが、この方法ならば、ある者の生命・名譽が別の誰かの宣誓に安易に委ねられてしまうことはない。しかもこれには別の利点がある。すなわち、かの講堂には常に人々が詰めており証人たちの言うことを聴いているから、真実以外を書き残すことは不可能である。このようなわけで、我らの間で行なわれているように尋問内容を枉げることがはまったくできない。というのは我らの間では、証人たちの言うことは審問官と書記以外は誰も知らないし、かねその他も大きな力になりうるのである。しかしこの国では尋問を行なうに際して如上の秩序がしっかりと守られている。そればかりか、彼らは自分たちの国王を大いに畏怖しており、国王もまた自分の居所から彼らを慥伏せしめているため、誰しも身じろぎも憚るばかりに暮らしている。つまりこれらの人々は裁判のやり方において卓越しており、この点、ローマ人もその他のいかなる種類の人も彼らには及ばない。

(24) 原綴り *mogafu*. ブラゴ語の *mushaf* (書物、巻の意味) に由来し、ここでは「コーラン」を指す (S. R. Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, Vol. II, p. 58).

(25) ブラフマンの少年は入門式ウパナヤナ (成人してカストの一員となることを認められると同時に師匠について学問を始める儀式) に際して三本の木綿の糸を撚り合わせ、ひとつの結び目を作った聖紐を左肩から右腋の下に掛ける (トメ・ピレス著、生田滋他訳注『東方諸国記』岩波書店(大航海時代叢書V)、一九六六年、一五七ページ、註(9))。ピレスはこの聖紐について「ブラメネは僧侶で、一本の紐を左肩から右腕の下にたらしめている。紐は二十七本の糸が三本によられて作られている」(同上書、一五六ページ)と記す。

(26) 原綴り *toura*. 「モーセの五巻」。すなわち『旧約聖書』の初めの五巻を構成する「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」。

これらの人々には別の美質があり、それは次のようなことだ。すなわちいかに大身であろうと、自分の関与する一件書類はすべて、それらが由々しく重要性を孕むものである限り自分自身の手で認めるのである。配下にたくさんさんの書記を抱えているにもかかわらず、自分以外の誰にも信用をおかない。彼らにはさらに別の大いに褒めるに値する美質がある。すなわちそれは、彼らが頭職を占め、嘘ではなく大公と言ってよいような人たちでありながら、訴訟当事者を聴聞するに際しては極端なまでに辛抱強いということだ。何度も彼らの前に引き出されるたびに、我らは欲するところを彼らに弁じ、かつ一件書類に認められていることは虚偽であり欺瞞であると訴えた。我らが彼らの前でチナの習慣どおりにきちんとしていらねえと、彼らは一切に対処するに多大の忍耐と諦めをもつてしてくれたのであるが、その様子は我らを驚嘆させたほどである。我らのもとにおける聴聞官なり判事なりにいかに堪え性がないかを知れば、なおさらのことである。もし連中のひとりひとりから権標を取り上げてしまえば、連中など、今述べているロウテアたちひとりひとりの召し使いを務めるくらいが関の山であろう。ただしキリスト教徒が異

教徒に奉仕するなどあり得ぬことは重々明白であるゆえ、彼らが異教徒であることにはこの際口を噤んでおく。異教徒でありながら、ということについてはこの際口を噤んでおく。異教徒でありながら、ということについては言え、囚われの身でしかも異邦人であった我らの一行が法廷でしかるべき保護を受けたことこそ、彼らの裁判を賞讃するための論拠として最良のものではあるまいか。早い話、どこかキリシタンの土地で、どこの誰とも知れぬ輩が逮捕されたとする。しかもチナにおける我らのように、彼を陥れる証言に狂奔する手合いがわんさかいるとすれば、この輩には殉教者となる以外いかなる末路もあり得まいと私は思うのである。ましてや異教徒から成るこの国において、この国の大官であるふたりの人物（朱紉と盧鏗）の追及に遭い、これを支持する多くの者たちを手強い敵に廻し、通訳もなく、意思を通じ合わせることもできぬという情況の中で、右の大官ふたりが逮捕され、我らへの配慮ゆえに彼らの官職・榮譽が剝奪されるのを、我らはついに目撃するにいたるのである。巷間の噂によれば、このふたりはいずれも斬首刑を免れまいということであるが、まあ今しばらく、正義の裁きが彼らに下されるかどうかを注視しよう。

刑罰

この国の諸法律について知りうる限りのことを述べようと思う。チナ人はなかならずく泥棒と人殺しを絶対に赦さない。姦通のために訴えられたいかなる者もまた同様に対処する。姦婦も姦夫も捕らえられその悪事が証明されれば、ただちに死刑が宣告される。ただしそのためには、双方に対する姦婦の夫からの告訴がなければならぬ。その行為の最中に踏み込まれた男女に対して採られる方法は右のとおりである。泥棒や人殺しとして捕まった連中は、すでに述べたように、牢獄に放り込まれ、そこで飢えと寒さとのためにきわめて短期間に死んでしまう。もし獄吏に食べ物を与えたり袖の下を掴ませたりするだけの手立てを有するがゆえに誰かが逃亡したとする。するとただちにこの一件が取り上げられ、宮廷にも知らされ、そこから死罪の判決が下される。判決文が届き公布されると、死罪を宣告された者は公衆の面前に引き出され、声を合わせ



図11 囚人たち（『人鏡陽秋』より）

て行なわれるお触れを合図に、多くの男たちが恐ろしげな形相で囚人の両脚・両手に鉄枷を嵌め、引き続きその首に一枚の枷を掛ける。その枷というのは次のようなものだ。幅は一パルモくらいであり、長さは囚人の男を立たせるとその膝に達するくらいであろう。この枷は二枚に裂いてあり、それぞれの角のところがおよそ一パルモばかり切り取られて、二枚が合わさると、ほぼ寸分の狂いもなく首がその中に入る。その形が正しいと確認されるとそれを囚人の首に嵌め、二枚の板を合わせてただちにそれらを釘で固定する。枷は首から上は一パルモの余地があり首から下へ垂れている。前方に垂れたこの枷の中に大きな文字で宣告文が、さらになぜ死罪を宣告されたのかが記されることになっている。この儀式が済むと、囚人は別の死刑囚と一緒に大きな牢獄に放り込まれる。彼らに対しては運命の時が到来するまで国王が食べ物を与える。枷はこのようなものであるから、それ自体がひとつの酷い拷問に他ならない。眠ることはできないし、両手は枷の下で手錠によって自由を奪われているから食することもできないのだ。これでは生きてゆけない。

死刑の執行

諸省の首邑たる市には、すでに述べたように主立った邸が四つあり、それぞれに牢獄が設けてある。すべての牢獄のうちで主要にして最大のものは第四の邸にある。これはタルフ Talfu（太守か大尊か。アジュダ写本では Tarpnut）の邸である。どの市にもたくさん牢獄があるが、死刑を宣告された連中がいるのはそのうちの三つだけだ。彼らは死刑を宣告されてもその後の処遇はいとも緩慢であり、言ってみれば彼らを生け簀の中で飼っておくという感じか。というのは、我らのいた牢獄でもごく日常的に目の当たりしたように、来る日も来る日も飢えや寒さのために多くの者が死ぬけれど、死刑の執行は年にたったの一日しか行なわれなからだ。その様子は次のとおりである。

チャエン（察院）すなわち裁判権を持つ為政者は彼らの年末に必ず首邑たる市へ赴く。そこにおいて、こうした連中はすでに死罪を宣告されている身ではあるが、その全員に対してもう一度聴聞のやり直しを行なう



図12 清代の処刑 (Justus Doolittle, *Social Life of the Chinese* より)

のである。多くの場合、彼らの中にはこの方法によって救済の道を得る者もあるが、その際チャエンはこの枷は誤って嵌められたるものなり、と言う。こうして全員に対する糾問が終わると、全員の中から最も罪の重い七人か八人が大体それくらいの数の囚人を選ぶが、その数は彼らが善もしくは悪いだけの方向に傾いているのかによって異なる。選ばれた連中は、人々を恐怖させ驚愕させるため広い野原へ連れてゆかれる。そこには身分の高いロウテアたちがすべて勢揃いしている。彼らの慣習に即した大掛かりな儀式やら偶像崇拜やらが終わったところで、連中の斬首が行なわれる。右のことは一年のうちただ一日にしか行なわれないので、その日に死刑を免れた者たちはかの広大な牢獄でその後の一年は無事である。そしてそこで食べる物を国王の負担によって与えられる。我らのいた牢獄ではこれが主要なものということもあって、こうした死刑囚は常に百数十人はいたものである。もちろん別の牢獄にいる死刑囚たちはこの数には含まない。

牢獄

こうした死刑囚のいるあれやこれやの牢獄はたいそう堅牢であり、チナにおいて囚人たちが逃亡したという話は全然聞かない。逃亡など不可能なのである。彼らの牢獄の様子であるが、上に杭の付いた高くて堅牢な壁に囲い込まれた広々とした敷地に他ならない。この敷地に入ると牢獄へ辿り着くまでに三つの門がある。敷地の中にはロウテアのみならず書記およびパルティアンゴン *parthiangyons* の広大な官舎がある。パルティアンゴンは日夜監視にあたる連中だ。さらにたいそうよく舗装されたひとつの大きな中庭があり、この中庭のひとつの隅から牢獄が始まる。この牢獄はたいそう頑丈なふたつの門扉によって閉めてあり、残虐な事件のために捕らえられた連中がここに入る。この牢獄は巨大であり、一切の必需品が売られる通りや広場があるほどだ。売買で生活の資を稼ぐ者たちがいる一方、かねで夜具を貸し出す連中もいる。あまりにも大きいものだから、毎日のように逮捕と釈放とが繰り返されているにもかかわらず、獄中にいるのが七〇〇人とか八〇〇人とかに足りぬこ



図13 獄舎につながれる囚人 (Gray, China より)

とはめつたにない。彼らはいかなる拘禁も受けずに暮らしている。

(27) アジュダ写本では *Patillos*、ボクサーによれば、たぶん典史 (*Tienstin*) の口語的な呼び名である捕廳 (*Puting*) に由来するものであろうという。

死刑を宣告された連中の牢獄へ入るには、とても低く鉄製の門を次から次へと三つくぐってゆく。するとそこには一面を平石で舗装した大きな中庭がある。この中庭は、四角形の露台のような造りであり真ん中だけが露天に曝されているのは、まるで修道院の廻廊のようである。これの奥に八つの獄舎があり、それぞれにこの中庭へ出てくるための扉が付いている。扉はすべて鉄製である。さて獄舎であるが、次のような造りだ。それぞれの獄舎には木製の足場が二本渡してあり、その中程に一本の通路を付けてある。囚人たちは皆夜はここで横になる。横になった後で足場にずらりと取りつけてある枷でもってその両脚の自由を奪う。こうした上でたいそう厚ぼったい木の格子を上からかぶせて、囚人たちがじつと腰掛けていることさえできなくする。まるで鳥籠の中で眠るようなものであり、それも眠ることができるとの話だ。やがて翌日になると、囚人たちは中庭や外のほうへ出てゆけるように自らの自由を奪っていたものを外してもらう。この牢獄はたいそう頑丈であるのに、囚人たちはあるいはそれぞれの獄舎で、あるいは外の中庭で厳しい監視を受ける。周囲は燭台と鐘とを手にした連中が監視に当たっている。彼らは相互に呼び掛けと応答とを繰り返しながら監視を続けるのだが、夜間、当直の交代は五回にわたって行なわれる。交代時に監視人の上げる声はたいへん大きく、寢床で横になっっている上役のロウテアにもその声は聞き取れるほどだ。死刑を宣告された連中の牢獄には、一五年から二〇年も拘禁されている者たちがいる。この連中がなお処刑されてしまうことから免れているのは、連中の生活を支えてやっっている身分ある親族の支えがあるからだ。囚人たちは一般的には靴作りをする。そして必要とする以上に国王から受け取る米の力を借りて獄吏と交渉する者もいる。まともに生きてゆけるように、また己の生活費くらいは自分自身で

稼げるように、獄吏から、首枷も手に嵌められた手錠も取り外して行動することを認めてもらおうというのである。しかしロウテアなり獄吏なり書記なりから点呼を受ける時は、囚人であることのあらゆる印、すなわち首枷や、両脚・両手を締める手錠を身につけていなければならない。こうした連中が誰か死ぬと、その死者はロウテアおよび書記の検死を受けなければならない。死者が鉄製の扉のあたりへ引き出されてくるが、この扉は、人ひとりが横になって這うようにせねば出てこれないような小さなものだ。死者がこちら側に出てくると、かの獄卒のひとりが鉄貼りの棒を手に取り、それをできる限り振り上げて、死者を三発殴りつける。この検死が行なわれた後、獄死者は死んだ者と見做され、もしいるならば親族たちへ委ねられる。もし親族がいなければ、野辺送りにすべく、国王が人夫をかねて雇って、遺体を外へ運び出させる。盗みを働いたり、既婚の婦人と寝たりした連中はこのようにして処断される。

債務者に対する措置

借金を負った連中は本当に借金のあることが証明されると、支払いを行なうまでは厳しく拘束される。しかしその期間をいたずらに過ごすことのないよう、この件を職掌の範囲とするタルフ *Alfo* (アジュダ写本では *Alfo*) なりロウテアなりから彼らはしばしば呼び出しを受ける。支払いのできない理由が了解されると、彼らに支払いの期限が指定される。その期限が過ぎても返済を実行していないならば、笞打された上このような生活を死ぬまで続けることになる。しかも彼らに借金のあることは確実に周知徹底される。もし債務者からの返済を優先して受けるべき債権者が多数に上る場合、彼らの行なう返済方法は、より昔に貸してくれた人へ最初に返済するという我らの方法とはまったく逆である。彼らの間では最後にかねを貸してくれた人へ最初の返済を行ない、後はこの順序に従って順々に返済してゆくのである。つまり借金をさせてくれた最初の貸し手こそが返済する最後の相手というわけだ。死者に負債が残っている場合の返済も右と同じ方法であり、彼らのためにかねを融通した最後の人にこそ最初の返済が行なわれるのである。右の慣習についてチ

ナで言われていることはこうである。借金の支払いがまだできそうな者へ融通してやって好意を示すことはさほど大したことではない。融通してやっても立ち直れるだけの能力がほとんどあるいは全然ない連中へかねを融通してやるほうが、ずっと大変である。回収不能になる危険を承知の上で最後にかねを貸してくれた人にこそ最初の支払いを行なうのは、その人のしたことが利害得失というよりも純粋な徳義心の結晶であるように思われるからだ、と。

私は、窃盗犯や殺人犯として捕らわれた連中はやがて法廷によって裁かれると述べたが、現行犯で捕まった連中についてはそうではないと理解して欲しい。彼らにはそれ以上の審理は必要ないからである。この連中はトゥタンのいるところへ連れてゆかれ、そこでただちに処刑されてしまう。時を経てその犯罪が立証された連中については、一年に一日だけ、全人民に驚愕を与えるため、諸省の首邑たる都市で催される裁判で処刑される者もいれば、死刑の宣告を受けながら運命の時を待ち続ける者もいる。

囚人の護送法

彼らは次のようなことを習慣としている。すなわち、泥棒の容疑がかかった囚人たちをある土地から他の土地へ移送する時は、連中を駕籠に入れて運ぶのである。これは国王にかねで雇われた男たちが肩に担ぐ。この駕籠は腰掛けた人とほとんど同じくらいの幅しかなく、腰掛けるための小さな椅子が付いており、そこに気の毒な受刑者が腰を下ろす。押し込め、腰掛けさせた後、二枚からなる板切れを上からかぶせる。大きな蓋のようなものと思えばよい。この板切れは双方向へ開き、真ん中にはちょうど首が入るくらいの穴が穿たれている。こうしてこの駕籠を閉じると、殉難者の首は外に、残りの身体はすべて内という具合になる。そのため、身動きはできず、どちらの方向にも頭を廻すことはできない。さらに頭を中に押し込むこともできないし、食事もできない。そして排泄行為はといえば、駕籠にそのために穿たれたひとつの穴を通して行なうのである。食べねばならない時は、食べ物をお口に突っ込んでもらう。

移送が続く限り、夜も昼も、駕籠からは決して出してもらえない。たまにたまに駕籠を担ぐ連中がたまづいたり激しく動いたり、その癖で駕籠を乱暴に地面に置いたりすると、中にいる者はほとんど絞首刑に処されるほどの甚大な苦痛に苛まれる。このようにして我らの仲間は七日間かけてこのフンチエオ（福州）市に運ばれてきたのである。彼らが我らに確言したところによると、その間ずっととうとうとするくらいの眠りさえもとれなかったという。彼らを最も苦しめたのは、駕籠の動きが止まってしまいう時であった。この町に到着するなり、駕籠の中から出されはしたものの、誰もが自分の身体を支えることができず、傍らにばったりと倒れてしまった。このようにかくも酷い扱われようでやってきたためか、それからほんの数日後、彼らのうち二名は死んでしまった。

福州市

我らはフチエオ（福州）市の計らいによって、しばしば牢獄の外へ出してもらった。その目的は、お偉方の邸へ連れてゆかれ、彼らやその妻妾たちに会わされることであった。彼らはこれまでポルトガル人を見たことがなかったし、我ら自身と、我らの祖国・風習について多くのことを知りたいという狙いもあった。そうしたことを彼らは逐一書き留めていたが、それは彼らが新奇な事柄には極端なまでに好奇心旺盛であるからだ。これらのお偉方は、外国人へは多大な敬意を払うのだが、同じように我らも彼らからはいつも名譽ある待遇を受けたものである。我らはこの市の計らいにより、見物するよう言われて、ときどき牢獄から出してもらったから、このフチエオ市について語るとしよう。それはひとつには、この市がそれ自体たいへん美しいからであり、さらにはこれが上述の一三省のひとつの首邑であるからだ。この市は極端に大きい。そして非常に堅牢で出来映えの良い壁によって囲まれている。壁は内側も外側もすべて切石によって組み上げてある。その幅から察して、壁の内部には一杯に詰め物が入れてあるに違いない。上のほうはたいそう立派に煉瓦を嵌めてあり、周囲には屋根に覆われた見張り小屋があり、しかもそこには非常によく出来た露台が設けられているから、どこにいても寝

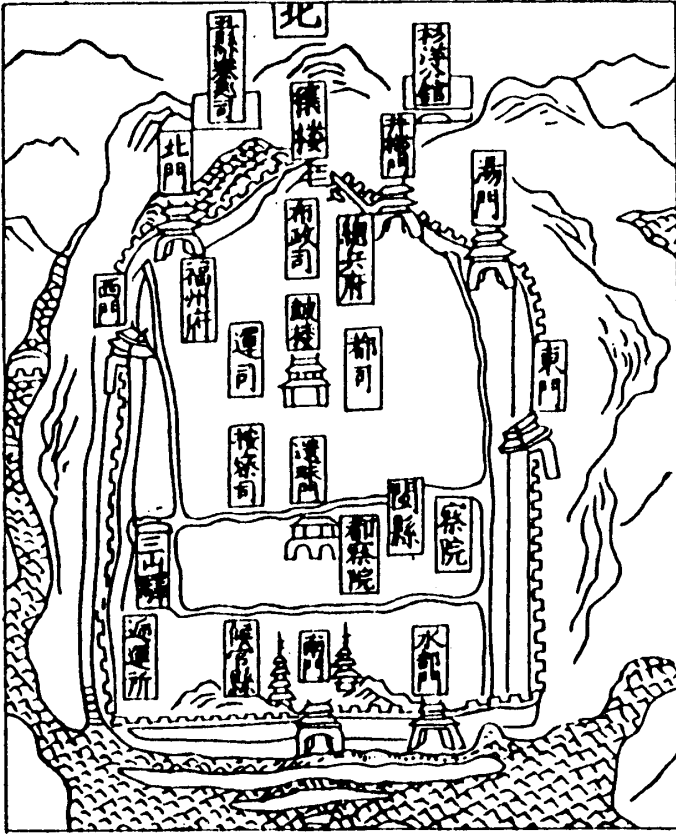


図14 福州図（万曆24〔1596〕年、内閣文庫蔵より）

泊まりすることが可能だ。これらに見張り小屋へ昇り降りするための階段は傾斜こそきついで幅は広く、騎乗して昇り降りすることができるといわれる。かくて人々は頻りに馬に乗ってそこを昇り降りしている。街路は舗装されており、またその他もろもろの通りについて上述したように、商人の数は無数と言つてよいほどだ。商人はそれぞれ店先の大きな板に自分が売ろうとするものを文字で記しているのに対し、職人はその職種がどんなであれ、店先にそれを絵にして掲げている。広場では大規模なバザールが立ち、あらゆる必需品がいつも潤沢に出まわる。

さらにこのフンチエオ市は、市を分かつ多くのクリークのために、全体が水の上にあるかのような印象である。どれにも船着場よろしく両側に板が取りつけてあるが、クリークはかなり幅広いので、通りの役割を果たすことができる。これらのクリークを跨ぐ形で石や木で出来た橋が

多数、市民の利用のために供されている。こうした船着場はかなりの高さがあるため、橋は通りと同じ高さに造られてはいても、たいそう大きな舟やパロがその下を通航しうるのである。これらのクリークが市に入りするところでは、壁の中に大きなアーチが造つてあり、そこを通過してパロはこれまた市に出入りする。このアーチを通過できるのは日中だけに限られる。夜間は、これらのアーチは水門によって閉鎖されるからだ。同じように、この市の城門もすべて夜間は閉鎖される。強調したいのだが、これらのクリークと、そこを行き交う舟々は、この市の気品を高めることに大いに役立つ。ゆえに我らはこの市にこそ第二のヴェネーザ Venezia〔ヴェネツィア〕を思い浮かべたものである。民家はすべて平屋であるが、素晴らしい作りである上に高さもある。一部には二階以上の家屋もあるが、これは商売を営むためのものだ。そもそもチナの都市というのは信じられぬくらい巨大である。その要因は、すでに述べたように、家々が平屋であることにある。その結果、それらの占める地面は大きくなり、民家がひどく拡散するというわけだ。このとおり都市は巨大であるものの、またそこに住む人々は無数ではあるものの、いたつて懦弱であるから、この国では、きわめて少ない労力で、しかも僅かな期間内に、デウスならびにわが君なる国王陛下への御奉公を為すことができるように思われる⁽²⁸⁾。

(28) 一六世紀以降、シナの諸事を著述なり書翰なりに纏めた西洋人たちはキリシタン宣教師を含めて、僅かな例外を除き、おしなべてシナ人の軍事的劣弱を指摘しており、それゆえにシナの征服は容易に実現するであろうとの見解を披瀝している。たとえばトメ・ピレスは、一六世紀初期、東アジアのポルトガル人の間に広まっていた、彼らの「脆弱」さに関する風聞を次のように伝えている。「それを征服するためには、われわれの属領であるマラカの総督がいうほどの力を必要としないに違いない。なぜなら、かれらは脆弱な国民であり、征服しやすからである。しかも同地に何度も渡航したところのある重立った船長たちは、マラカを占領したインディア総督ならば、十隻の船でシナの沿岸地帯のすべてをも征服することができる

であろうと断言している。」(トメ・ピレス著『東方諸国記』二四〇～二四一ページ)

当フンチエオ市において、きわめて一見に値し、しかも我らをはなはだ驚かせたひとつのものを我らは見た。それは、国王が自らの官吏たちのためそれぞれの省に有する四つの官邸の入口である。すでに述べたように、そのうちで最も大きなのは、あたかも塔のような造りであり、その塔は上から下まで継ぎ目のない四〇個の石柱の上に建ててある。それぞれの石柱は周囲一二パルモ、長さにして四〇パルモくらいであり、周囲一二パルモとは我々がしばしば計測してみたものである。石柱はいとも巨大なもので、このような石に彫琢を施すなど、いかなる工具を用いても不可能なことと思われたものだ。石柱はどれも上から下まで素晴らしい技でもって八角方形に仕上げてあり、色や長さはもちろんその他あらゆる点で徹底した均一性を持ち、およそ食い違いなど全然ないように思われた。我らを驚愕させた代物であった。

チナの国名の由来

我らはこの国をチナ China と呼び、この国の人々をチンス Chins と呼ぶ。ところが我らがここに囚われている全期間を通じてこの国の住民たちからはそうした呼び名は絶えて耳にすることがなかった。そこで私はこの国がどう呼ばれているのか知ろうと心に決めた。私はこの件について幾度か質問を重ねたが、チンス Chins と呼びかけたのでは彼らは皆目反応しないのである。私は彼らにこう言った。ポルトガル人はわが国の呼び名をポルトガルで最も古い一都市から採りました。同様に大方の国民も自分たちの国の呼び名をそうして採っています。インディアでは誰もがあなた方をチンス Chins と呼んでいます。あなた方に教えて欲しいのです、一体あなた方は自分たちの国の呼び名をどこから採ったのか、御前にチナ China と呼ばれる都市でもあるのですかと。これに対して彼らは常にこう答えた。そんな呼び名はないし、かつてもなかったと⁽²⁹⁾。そこで私は次のように質問した。この国を総括する呼び名は何ですか。

あなた方の誰かがどこか外国の土地へ赴いてどのお方かと尋ねられた時、あなた方は何と答えるのですかと。これに対する返事はこうであった。遠い昔、この国は多くの王の治めるところだった。にもかかわらず現今は全国がただひとりの王の治めるところとなっている。多くの王が治めたもろの諸国にはそれぞれ独自の呼び名があったが、この呼び名が今に引き継がれているのだと。この諸国こそがすでにふれた諸国に他ならない。ともかくにもこの国の総称はタメン Tamen (大明) であり、その国民はタメンジス Tamenjis (大明人) と呼ばれるのである。チンス Chins という呼び名はここでは全然私の耳に入らなかったし、彼らには意味不明の言葉である。繰り返して言えば、この国はタメン Tamen と呼ばれ、その人々はタメンジス Tamenjis と呼ばれるのである。私にはこの件についてはこう考えるのが良いように思われる。すなわち、この国に接してコチンチナ Cochinchina と呼ばれる別の国がある。チナに比べればこの国はマラクア Malacca (マラッカ) に近いため、この国に関する情報と知識とを初めて得たに違いないのは、必然の理としてジャオ (ジャワ) 人 Jaos とシアメ (シヤム) 人 Siamese であろう。そこでコチンチナの人々は彼らからコチンス Cochins と呼ばれるようになり、そこからチンス Chins という呼び名が生ずるにいたり、その国も一括してチナ China と称されるようになったのではないかと。しかし彼ら固有の呼び名は前記したとおりである。

(29) ヨーロッパ諸国語における China, etc. が始皇帝によって創始された秦の音訳である Chin (Tsin) に由来することは間違いないところである (植村清二著『万里の長城——中国小史』中公文庫、一九七九年、三七ページ)。ここでのペレイラのような初歩的な誤解が訂正されるにはマッテオ・リッチの本格的なシナ研究を俟たねばならなかった。リッチは、シナの近隣諸国の人々が今もシナをさまざまな呼称で呼んでいると述べた後、「それぞれの国名は彼らが最初に伝え聞いたものなのだろう。コチンチーナ (コチシナ) 人やシヤム人はチン (秦) と呼び、ポルトガッロ人はこれに倣った」(マッテオ・リッチ著、川名公平訳『中国キリスト教布教史』一、

岩波書店〔大航海時代叢書第II期8〕、一九八二年、九ページ）と記している。

南京市と北京市

ナンキン〔南京〕市について我らがさらに知ったことは次のとおりだ。すなわち、昔、ここに歴代の国王が住む習わしであったことを記念して、ある大きな邸における金塗りの扁額に国王その人の名が記されているという。その名は常に覆いが掛けられており、彼らの暦年の一定の祝日を除けばこれが人目に曝されることはない。扁額はこのように覆われているのだが、全市中の大官たちは義務として毎日これへ拝礼を行ないにくく。ここからも読者はこの国王がいかに畏怖されているかを知り得よう。その畏怖のされようは大変なもので、国王の名そのものが崇敬の対象となるのである。これは、パチンのみならず、諸省の首邑であるすべての都市において行なわれていることだ。ポンチャシンの官邸にもこのような扁額があり、そこに国王の名が記されているが、これに拝礼が行なわれるのは、彼らの大きな祝祭日に際してだけである。しかしここナンキン市では、遠い昔、ここに代々の国王が住んでいたのを記念して、他のもろもろの都市で廃れてしまった如上の慣習が残っている。この扁額の中に王位を継ぐ国王の名が記されてゆく。

さらに、国王のいるパキン〔北京〕市について我らが知ったのは次のようなことだ。この市は巨大で、端から端まで行こうと思えば、馬に歩かせて優に一日はかかる。これは市内に限った話で、市内よりもずっと大きな郊外は考慮に入れない。しかも、我らが見てきたもろもろの都市に比べれば、このパキン市とて大したことはないのである。ありふれたものと贅沢なものとを問わず、あらゆる商品を扱う商人がいるが、その数は市内においてよりも郊外においてずっと多い。人々から聞いたところによると、パキン市は水に取り巻かれていて、というより、濠がその廻りを取り囲んでいるのだが、そこにはたくさん魚がいて、おかげで国王は大いに潤っているということだ。

王室の婚姻政策

さらに聞くところによると、このチナ国王にはともに戦闘を交えている王はタルタロ人（モンゴル人）以外にはいないのであるが、この王とも八〇年以上前に和平を結んだという。両者の友好関係はさほどではないが、それでも双方の間で婿や嫁の遣り取りをしているとのことだ。チナ歴代の国王たちは自分の息子や娘を誰と結婚させるのかという私の質問に対し、その答えはこうであった。昔、チナの国王たちは自らの娘を娶わせようと望んだ時、きわめて大掛かりな宴会を催すことを常とした。その宴会にはあらゆる階層の男たちがやってきて、食事をするのであるが、その場へ連れてこられたのがこれから結婚しようとする娘たちである。そうして彼女らに一同を見渡す機会を与え、その中から自分の気に入ったひとりを選び出すのだ。選ばれた男がたまたま身分の低い者であっても、たちどころに重い身分となる。が、この習慣は何年も前から今に至るまで行なわれていないという。皇女たちは国王の意思に従って身分高く国内生まれの男たちと結婚し、如上の秩序は皇子たちにも適用されているとのことだ。

社会福祉

彼らにはさらにもうひとつ優れていると思われる点がある。それは彼らが異教徒であることを考えれば我らが大いに驚嘆させたことである。すなわち、いかなる都市にも病院〔養濟院〕があり、そこには常に人々で一杯なのである。私たちはここに滞留中、貧者が戸口で施しを乞うのを決して見なかった。そのわけを訊ねたところ、私への答えはこうであった。すなわち、どの都市にも一カ所大きな囲い込みの敷地があり、その中に気の毒な人々のための宿舎が多数ある、と。そうした気の毒な人々とは、盲人や不具者、あるいは老齢のためにはや働きに出られなくなり、ここに收容される以外生活の糧を得られなくなってしまうという連中である。彼らはこの宿舎においてたつぷりと米を貰う。他のものはなくとも米だけは有り余るほどに。この待遇はそこに收容された連中の存命する限り変わることはない。ここへの入所方法は次のとおりだ。ある人

が病気とか盲目とか不具とかになる。するとその本人がポンチャシ(布政使)に一通の嘆願書を認め、その中で述べたことを本人が真実と証明すれば、この広大な宿舎に迎えられる。すでに述べたように、死ぬまでである。彼らはその内部で豚や鶏の飼養を行なう。そういうわけで彼らは物乞いに歩き回ることなく自分自身で食の糧を得るのである。

内陸部にも魚が出廻る

すでに述べたように、このチナの地は河川が四通八達しており、その様子たるやそれを実見した者でなければ信じる事ができぬほどだ。今、私は改めて確言するのだが、内陸部へ深入りすればするほど河川はますます大きくなってゆくのである。我らは奥地にまで分け入り、海の魚など全然ないような場所に達した。それに塩はきわめて遠くから運ばれてくるため極端な高値であった。にもかかわらず河から水揚げされた鱈やかさご、鯰や石鯛、かさめやえい、その他我らを驚かせるほどに多様な魚類でヴァザールは溢れているのだ。同じことはマリスコ(貝・海老・蟹の総称)についてもあてはまる。すでに述べたように海からは遠いところなぜかこうしたことが可能なのか、我らにはその理由が分からなかった。淡水産のマリスコは全然風味がないが、魚はきわめて美味である。その大半はすべて養魚地からのものだ。この奥地全体にこうした新鮮な魚を普及させるのに用いられる方法は次のとおりだ。

これらの河が集まり海へ注ぐところには、どこにも、それも塩水の混じっていないところでは、三月と四月いっぱい、夥しい数の小舟が浮かぶ。このような小舟はチナには無数にあると言ってよく、その様子は実際に見た者でない限り信じ得ないであろう。さて、これらの釣り舟はただ稚魚を獲る以外のことは行なわない。この稚魚を飼っておくため、河のほとりには、小枝の上にたいそう細かく強い網で作られたタンクを無数にしつらえておく。このタンクは二ないしは三パルモが水中に沈んでおり、およそ一パルモ前後は水上に出ているという仕掛けだ。ここに稚魚を放り込み、人間の出す尿と糞便の力を借りてこれを生かしておく。やがて時期が来ると、この稚魚を目当てに大きなソマ⁽³⁰⁾やパロが多数や

つてきて稚魚を積み込む。このような舟々に積んでこの稚魚を運ぶ方法は次のとおりだ。ソマには稚魚を入れるための大きな籠が予めいっぱい付いてある。船縁にびっしりと取り付けられた籠の内側には油紙が貼ってあり、水とその中に放り込んだものすべてを保持する役割を果たす。ソマはこうして稚魚を満載し、毎日のように水を取り換えながら、河の上流へできる限り溯つてゆき、あらゆる都市や町、大小の村々に稚魚を売り捌く。ところで付近の住民はすべてあるいはその大半が飼養池を持つていたので、ひとりひとりには必要な稚魚を得て自給する。これらの舟ではもうこれ以上上流へゆけないとなると、より小さな舟々に乗り換える。この地はすべて河で潤われているし、海に注ぐ河には必ず右のような人智が生きている。これほどの内陸地に新鮮な魚や多様な魚が溢れていること自体大いに驚くべきであるが、彼らが稚魚を飼養しておくに用いている方法を知った時ほど我らが驚かされたことはなかった。尿尿がたつぷり溜められた場所に石組みを施して作った飼養池ではそうではないが、この稚魚を育てるのに用いる主な餌は、水牛および牛の糞である。そしてこの糞のおかげで稚魚はみるみる成長し太るのであるが、その様子は驚くべきものだ。稚魚は三月と四月に捕獲すると述べたけれども、その漁を見たのがたまたまこの時期だったのである。しかし後に知ったところによると、この漁は常時行なわれているという。なぜなら人々はこうしたやり方で食を得ているし、飼養池に稚魚を供給しておくことが必要なもの右の理由からである。

(30) 原綴り *soma*。マレー語の *son* に由来。昔、シナおよびマレーシアで用いられた商業および戦闘用の舟艇でジャンクに類似する (S. R. Dalgado, *Glossario Luso-Asiático*, Vol. II, cf. pp. 313-314)

福建省から江西省・広西省へ

こうして我らはフォキエン省を過ぎ、そこに別れを告げ、ここキアンシ省の地に入った。ここは上述したように佳良な陶磁器が作られるところだ。我らは山並みの向こう側の麓にある市(寧都府か)に着いた。その

あたりを河が流れていたので、我らは舟艇に乗り込み、その河を下り始めた。河のどちら側にも多くの市・町・村が認められ、食事したり、舟艇のための必需品を得たりするために我らは上陸を重ねた。上陸したところでは夥しい商品を眼にしたが、わけても眼についたのが陶磁器である。陶磁器については我らが捕らわれて以来眼にしたものの大半がここにあった。この河を下流に向けて下ってゆくと、やがて方角は南となり始め、我らは多少の喜びを感じたが、それは我らが永らく遠ざかっていった暖かい土地へ到達しつとあると感ぜられたからである。河の流れのままに我らはキアンシを通過した。我らがこの省を出てこれから入ろうとする省について語る前に大いなるクアンチェフ Quanchefu (贛州府) の街について述べよう。ここには常時トゥタンが駐在する。上述したように、トゥタンはゴヴェルナドールに相当し、二省または三省を統治するゴヴェルナドールもいる。すでに言及し我らのことがきつかけとなって縊死したトゥタン(朱紉)はこの省の出身で、フォキエン省で統治に当たっていた。その人物は大物であったにもかかわらず首吊り自殺を遂げた。ところがこの国はあまりにも広大であるためか、我らが通過した多くの地方においてこのことは知られていなかった。トゥタンが自殺を遂げてから一年近くになろうというのである。

我らはこのクアンチェフの街に到着したが、そこでは河はすでにたいそう広大で海にも似た観を呈していた。我らが舟艇に乗り込んだところでは、河はいとも狭く水深も浅かったから舟艇もたいそう小さなものであった。ある日のこと午前九時頃から、城壁沿いに漕ぎ始め、そのまま水の流れに任せていると、やがて正午になって、我らはいそいそ大きな舟どもを組んだある橋に辿り着いた。これらの舟は二本の鎖によって繋いであるのだが、その鎖は極端なばかりに太くて、それまでに我らはいれほどに太い鎖を眼にしたことはなかった。そこまで辿り着くと、我らは午後までそこに留まった。我らはおろか誰もが下流に向けても上流に向けても往来することができなかった。やがて日暮れ時になってふたりのロウテアが来て、彼らはそれぞれの側にわざわざそのために設けられた足場に腰を下ろした。すると橋は双方向に開かれ、大小の舟が夥しく

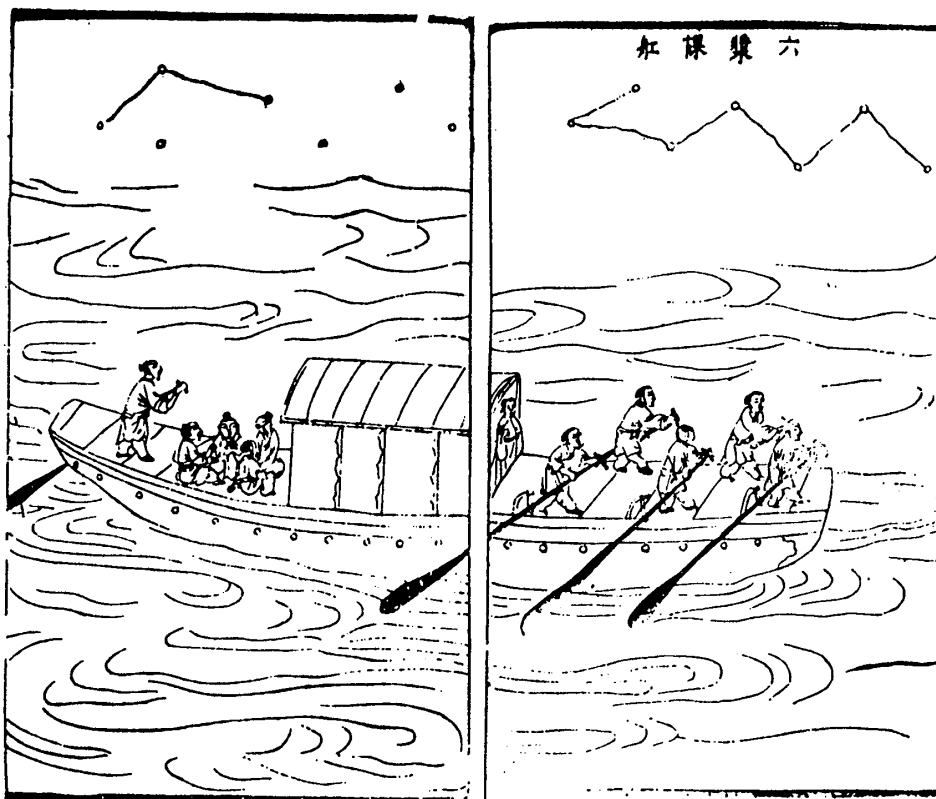


図15 六丁櫓の課船——塩商に上納させた銀を運ぶ船 (宋應星『天工開物』より)

往来し始めるのだが、我らはそれらを六〇〇艘以上と見た。上流へ向けて片方の側を通過する艇がある一方、下流に向けて他の側を通過する艇もあるというように、ここには一定の秩序がある。やがて艇どもの通過が終わると、橋は再び閉じられる。我らはこのようなことが、しかも毎日のように行なわれることを知ったわけであるが、それはここが商品の多数行き交う主立った通路のひとつであるからだ。ここで税、特に塩に対する税の取り立てが行なわれるが、これこそこの国おける国王の最大の収入源である。こうした水門は岸边にごく近いところで開かれるし、そこでは河岸は切り立った急勾配であるから、河岸すれすれに通らない限りはここを通過できない。男たちがかの足場においてここを無断で突破する連中がいなかどうか見張っており、もし異常が生じた場合、彼らは鉤でもって橋を固く固定してしまう。こうすることによってたとえ帆走している舟さえも税の取り立てが完了するまではその動きを止めざるを得なくなる。この橋は一二艘の艇からなる。我らはこうして午後まで橋が開くのを待ち続けたのであるが、我らを見るためにやってきた連中から蒙った迷惑は大変なものであった。なにしろ連中は夥しく、我らをひどく圧迫するものだから、橋が開くまでの間、どうしても騒ぎの圏外に出ていずにはいられなかった。それでもなお我らは、人間を満載した多くの艇の包囲から免れることはできなかった。それまでに通過してきたその他の市・町・村でも、我らは群集に押しかけられ、しばしば避難を余儀なくされたものだが、ここではさらにひどかった。とにかく人間が極端に多いのだ。この橋は主として対岸へ渡る市民の役に立っているのだが、対岸もまた人口が密集しており、もし城壁さえ欠けていなければ、こちら側に優るとも劣らぬ規模であろう。

こうして橋の片側から、ほとんど夜になるまでクアンチェフ〔贛州府〕の街沿いに進むと、やがてこの河に合流している別の河に行き当たった。そこから城壁沿いにしばらく水面を行くと、やがてこれまた艇どもで造られた別の橋にぶつかった。この橋もまったく素晴らしい出来映えであるが、大きな河のあの橋よりはずっと小さい。その夜とあと二日を我らはそこで過ごした。そこは群集の猛威の外にあり、押し合い圧し合いか

らは免れた。この河が別の大きな河に合流していることから、土地はあたかも岬のような形状を為し、その中に市街が押し込められている観がある。いずれの河も夥しい大小のジュンクオ〔ジャンク〕やソマで一杯であり、同行の連中は皆その数を三〇〇と踏んだが、これはたいそう控え目な見積もりだ。私はもつとたくさんであったと断言する。こうした舟々の力が主に発揮されるのは我らの入り込んだこの小さな河においてであるが、舟々の中でも大きなバラオというのがあり、この河に合流しているその他もろもろの河を伝ってトウタンが国王のいるパキンへ行く時はこれに乗船する。この河に合流しているその他もろもろの河を伝ってゆくのだが、それというのも、しばしば述べてきたように、この国には河川が四通八達しているからである。私たちはこうした舟艇を是非見たいと思い、そのうちの数艘に入ってみた。我らが見たところ、そこにはいとも贅沢に金箔を施した寝台の据えられた部屋があり、食卓・椅子・厨房を備えた部屋もあった。すべてがいとも清潔でまったく完璧であり、その様子は我らを極度に驚かせた。

このクアンシ〔Quansi〕省は、私には南方におけるこの王国の辺境であるように思われた。というのは、この省に入り始めるや、我らはいつも南側に、ほとんど絶えることなく、いとも大いなる山並みをあまり遠隔でないところに眺めながら進んだからである。私がああ山脈の向こうにはどんな人々が住み、生きているのかと尋ねると、答えはこうであった。盗賊だ。しかも私らとは言葉の通じ合わぬ連中だ。この河からあの山並みまでは幾つもの間道が通じているから、それを伝って多くの連中が駆け下つてきて、ときおり酷い悪事を働く。そのため、クアンシの土地が始まるところでは厳しい警備体制がとられている。

当クアンシの省の市^①や、この省全体のもろもろの市・町・村はこの方面における王国の辺境に位置していることもあり、すべて大変な内奥部にある。この河および山並み沿いに私たちが常に認めてきたように、かくも大きな集落がしかも多数拓かれているとは、防衛上の必要に由来するものと思われる。かくも乾燥した不毛の土地に無意味にこんな多くの集落が拓かれているとは考えにくいのである。我らに対する説明から

察して、またこの河の警備にとられている方法なり秩序なりから判断して、これほどの奥地に多数の集落が存在するわけは、すでに述べたように、ここが王国の辺境のひとつであり、なんびとにも帰順しない人々と対峙するための前線であることにあつたように思われる。

(31) これは桂林府を指すと思われるものの、これ以下の記述からして梧州府か、西江沿いの一都市を指している可能性も否定できない。

この地方は奥地に入つてゆくにつれて、都市の数も増え、しかもその規模が大きくなつてゆく。そこから最も近くにある海港はカンタンCantão〔広州府〕であり、この河はそこで海に注ぐ。この河はこの地方に不足している塩や塩漬けの魚や胡椒、その他の物資を満載した大小のパロの絶え間ない通路となつてゐる。以上のものがカンシンCancim〔アジダ写本ではCacin〕河³²をまる一カ月要して安全に往来しうるようにするため、わが一レゴアの一〇分の一に当たる彼らの一里程ごとに一カ所の監視塔が設けてある。そこには武装した三艘ないし四艘の大きなソマ、それに河の兩岸で終夜監視に当たる小さなパロが配備されている。こうして睡眠をとり戻つてくるパロもこの監視塔のおかげで安心してゐることができる。しかもこのパロは戻つてくる時は隊商のように何艘も固まつてなのだ。これらの監視塔にはその通路によつて異なるものの、それぞれ三〇から二〇〇の人数がゐる。この警備はウチエオUcheo〔梧州。アジダ写本にFucheoとあるのは誤り〕まで行なわれる。そこにはこのクアンシ省とカンタン省のトゥタン〔両広総督〕ひとり常駐駐在してゐる。このあたりが行程のほぼ中間であらう。そこからは溯つてゆくにつれて、河幅は狭くなり、水路の危険も増すため、四〇ないし五〇艘のパロからなる武装船団が常に往来し、商品を運ぶ舟どもを護衛してやる。以上に要する経費はすべて国王の負担となる。見事というほかはなく大いに立派なことと思われたので、私がこの国で実見した偉大なることどものひとつとして、ここに書き留めておきたかつたのだ。

(32) この綴りからすると西江よりも桂江を指している可能性が強いであろう。

チナにおけるムスリム

この市全体をゆつくりと巡遊している間に、私は書き留めておくに値する幾つかの事柄に遭遇した。そこでその幾つかをここに述べるとしよう。それは第一に、ここで我らが出会つたモウロ人について、そして彼らモウロ人がどこからチナへやつてきたのかについてである。フキエン省に滞在した頃、我らは数人のモウロ人に逢つた。彼らは自らの宗旨についてはいきわめて僅かなことしか知らず、「マファメデMafamede〔ムハンマド〕はムスリムであり、わが父もムスリムだった。そして私もまたムスリムだ」ということ以外何も口にしなかつた。こうした題目や自分たちの聖典であるアルコランalcoran〔コーラン〕に由来する不確かな言葉やらを唱えながら、また豚を食わぬという掟を守りながら、彼らは暮らし、やがて悪魔に召されるのである。私はこうしたことを実際に見たから、チナの多くの都市にマファメデの聖遺物の存在することは確かであると考へたのだが、そこで私の脳裡に思い浮かんだことは、チナの人々を自分たちの宗派へ改宗させようと試みてゐる多少のモウロ人たちはシアンShiao經由でやつてきてゐるのではないかということであつた。やがて我らがこのクアンシ市に到着し、彼らと出逢うに及んで、私は彼らから情報を得、真実を掴んだ。

彼らから聞き知つたところによれば、このモウロ人たちは、往時、橋楼を備へた釘打ちの大船に乗り、多くの商品を携へて、かなたパケンの方角から³³、かねて国王より彼らへ下賜されてゐた某港へ来たという。国王はこの地と交易しようとする者すべてに港を与えるのである。こうして彼らは湾の入り江にある小さな在所に來、時を経るうちに、当地で最も勢力のあつたロウテアをムスリムたらしめるに至つた。そのロウテアが家族ともどもムスリムとなると、他のロウテアにもムスリムになる者が始つた。この点においてチナ人には全然頓着がなく、おのおのが望むものを崇めかつ望む道を歩むのであるから、そうしたことをとや

く言う者はいなかった。やがて、かくも多くの人々が自らの宗旨に鞍替えし、かのロウテアさえ自分の思いどおりにしてしまったことを確認したモウロ人たちは、食物としての豚をチナ人から全面的に奪い去るという挙に出始めた。しかしこの国では、男も女も豚を食うのをやめるくらいなら、その父母を捨てるほうを選ぶくらいなので、これにはとうてい我慢ができなかった。我慢のできぬ理由は他にもあった。チナ人すべてが豚を大いに好むということに加えて、豚の飼養こそが身分の高下を問わずあらゆる人々の生活の糧となつていたのである。そこで人民は大身に改宗したロウテアはあなた方に、それぞれ叛逆を起こそうとしております」と。この国では叛逆は絶対に許されないから、この一件が国王のもとに達すると、くだんのロウテアならびに首謀者の回教徒数人はこれを死罪に処し、他の者は逮捕すべしとの布達がただちに出示された。その後、死罪を免れた連中は幾つかの都市に分散させられたが、我らがクアンシン Quanzhou 市においてそうであつたように、彼らはそこで国王の奴隸として留められた。この流罪の境遇を体験した人々は男女合わせて六〇余名に上つたが、この事件が起こつてからすでに二〇年を経ていることもあり、そのうち現在も存命なのは五人の男と四人の女にすぎない。しかし物故者と生存者とが遺した子や孫は二〇〇人を超し、彼らは当市のみならず父祖が流されてきた他の諸都市においても自分たちのメスキータ〔モスク〕を持ち、毎週金曜日にはそこへサレマ^(註)を行ないにゆく。しかし私には思われるのであるが、このようなことが存続するのも、その故地からやつてきて今も存命する少数の人々の寿命が尽きる時までではないであろうか。そうした彼らさえ生粋のマホメット教徒というよりはムスリム的であるというにすぎない。ましてその子や孫にいたつてはその信仰は大いに乱れており、ムスリムと呼べるところは僅かに豚を食わぬことだけだ。いや、密かにこれを食う連中もいる。私はこの連中を通じて、彼らの生まれた土地がサマルクアン Samarkand〔サマルカンド〕と呼ばれること、そこは多くの王が住む広大な地方であること、そしてそこにはインディアに関する消息がかなり伝わっていることを知った。

というのは、彼らが我らの小姓たちを見るや——その中にはグザラテ〔グジャラート〕人 Gujarates の小姓もいたのだが——、即座に、君らはインディア人 Indos だろうと言つたからである。彼らの話し言葉について言えば、我らの仲間でこれを理解できる者はいなかったけれども、多くの単語がペルシア語であることは分かつた。私は、チナ人が彼らの宗旨へ改宗しているのかどうか彼らから聞き出したのであつたが、それに対して彼らの言つたことはこうであつた。「結婚相手となつた妻女は大なる苦勞の末に改宗させた」と。彼らはなぜ苦勞の末なのかという理由を説明するのに、ただ豚を食ふことと酒を飲むこと、これらから彼女らを遠ざけるのがいかに難儀であるか、だけを挙げた。そこで彼らから私は彼らの宗派にチナ人として改宗した者はいるかどうか知りたいと思つた。彼らが言うには、自分たちの結婚相手となつた婦人については大きな苦勞の末にこれを改宗させたということであつたが、なぜ大きな苦勞の末になのかそのわけについては、豚を食ふたり酒を飲んだりするのをやめることは、チナ人の望まぬところであるからだと言ふばかりであつた。そこで私は言いたいのであるが、もしこの国が我らとの連繫を深め、我らの律法が彼らのそれを侵すものではないと分かれば、彼らはさしたる差し障りもなく我らの律法を受け入れ、かつ自分たちの笑うべき宗教を棄て去るであろう。このことは明々白々であり、他ならぬ彼ら自身、偶像崇拜に耽つている時の自分自身をあざ笑つている始末なのである。さらに私は以下のことを知つた。すなわち、これらのモウロ人がチナへ渡つてくる時に常々經由していたその海というのは、実はある非常に大きな湖〔カスピ海〕であるということだ。この湖はタルタリアとペルシアに沿つて内陸へ入り込み、その反対側にはチナの全土が広がり、同様にモゴール人の土地が南に向けて延びている。これは本当であるらしい。というのは、我らの見たモウロ人は白色というよりは黄褐色の膚である。したがつて彼らは、シナ以上に——それもかのパキンの方面以上に——暑い土地の出身なのではあるまいか。事実、かの方面はとても寒冷で、疑いもなく冬には河が凍結し、多くの河を荷を積んだ荷車が渡れるというのである。

(33) 原語 *por aquella banda de Paquem*. ベレイラは、カスピ海を発して万里の長城に到る水上（あるいは海上）交通が可能であったかのような誤解をしている。

(34) 原綴り *saletna*. アラビア語で平安を意味する *salām* に由来。イスラム教徒が挨拶を交わし合う時に用いる表現 (S. R. Dalgado, *Glossário Lusó-Asiático*, II, cf. pp. 274-275)。

チナにおける外国人

我々は、このクアンシ市で、多くのタルタロ人 Tataros・モゴール人 Mogores・ブラマ人 Bramas・ラオス人 Laos に——男のみならず女にも——出逢った。タルタロ人について言えば、彼らはいわゆる白い膚の人々で、大いなる騎兵であり、優れた射手である。彼らの故郷はかのパキンの方面でチナと境界を接している。その間には両国を隔てる長大な山並みがあつて、そこを幾筋かの間道が通っている。そのこちら側にもあちら側にも要塞が設けてあつて、常時、守備兵が駐屯している。往年、このタルタロ人はチナといつても戦さを交えていたが、このところ八〇年以上は両者の間は平和であつた。彼らがチナに再び戦争を仕掛けたのは、我々が逮捕されて二年目のことであつた⁽³⁵⁾。モゴール人について言えば、彼らもまた白い膚の人々であり異教徒だ⁽³⁶⁾。彼らから聞き知つたことだが、彼らは一方において上述のタルタロ人と接し、他方においてペルシアのタルタロ人と接するという。彼らは身振り手振りで、自分たちの衣裳のことや尖がり頭巾のことを伝えようとするのだが、しかしそのようなものは全然見かけなかった。モウロ人たちは我らに断言していたが、タルタロ人とモゴール人は国王の居るところにはたくさん住んでいるという。したがつてたいそう価値の高い一種の青色染料をチナへもたらしたのには、タルタロ人とモゴール人であるに違いない。そこで我らは一同確信したのだが、それこそオルムス Ormuz へもたらされるカンバリア Cambaia の藍 (anil) に違いない。右に述べたことこそ、この国の位置に関する真相であつて、チナが北方においてアレマニヤ Alemanha に接しているという、私もたびたび聞かされたことは真実ではないので

ある⁽³⁷⁾。

(35) 明朝第六代皇帝正統帝（在位一四三五—一四四九）がモンゴル系の部族オイラトを率いるエセン・ハンのために、一四四九年、河北省土木堡で捕虜となり、後、送還されたことから、モンゴル族のアルタン・ハンが一五〇〇年に、大同で総兵の張達を殺し、古北口を攻め、通州・白河に兵を進め、ついに北京城を包囲するにいたつた「庚戌の変」までの経緯にふれている。

(36) 今の Mogores は、中央アジアから北インドへ進出しつつあつたインド最大のムスリム王朝ムガル帝国を指しているに違いない。アフガニスタンに勢力を確立したバーブルがインドに侵入してデリーを陥れ、デリー・スルタン朝に代わつてムガル朝を開いたのは一五二六年である。

(37) 一二二九年から一二三五年にかけてチンギス・ハンが東欧にまで遠征を企てたり、一二三六年から一二四二年にかけてチンギス・ハンの孫バトゥがロシアから東欧を攻め、ワールシュタットの戦いでドイツ・ポーランドの諸侯連合軍を破つたり、その別軍がハンガリーに侵入したりしたことによつて、シナの征服王朝となつたモンゴル族の版図がヨーロッパの辺境にまで広がつたことから、タルタロ人の事績がそのままシナ人のそれと誤解されてしまつたのであろう。

ブラマ人について言えば、我々はこのクアンシ市において数人の男女に逢つた。彼女らの中に渡来してまもない女性がひとりおり、彼女はペグー人女性 Pegues が行なうような流儀でいまなお髪を結うていた。我々の一行には以前ペグー Pegues にいたひとりみのネグラ⁽³⁸⁾がいたのだが、このネグラが彼女ばかりかその他の女性とも話してみたところ、その多くと言葉が通じたのである。渡来してまもない彼女は、私たちが腰を据えるつもりでかの市へやつてきたものと思ひ、こう言つた。皆さん、どうぞ気分を楽にお持ちなさい。ここから私の国までは五日にも満たぬ道程です。当地を通つて皆さんは私の国へ行くことができるのです。一体どの道を、どのような方法で行くのだ、と我々が質問すると、彼女は我

らにこう言った。最初の三日は人影のない道を行かねばなりません。ひたすら幾つかの大きな山並みを越えてゆくだけです。が、やがて人々に出逢えるでしょう。そこから二日も歩けばそこはもう私どもの故郷であるブラマ人の土地です、と。右のことから私は言うのだが、このクアンシの方面こそ、この国の諸境界のひとつなのである。そして上述したように、ここからまっすぐに南北へ走るこの大いなる山並みこそ、この国を他の諸国から分かつものであり、その西方にあるのがブラマ人の国である。彼らの国については、ここで述べたとおり、いとも確かな消息を得ることができた。この山並みの向こう、さらに南方に位置する別の山地の中にあるのが、シアンシSiao およびラオスLaos——それらの出身者にも当地〔クアンシ市〕で出逢った——の国であり、カンボジャCamboja・チャンパChampa・コチンチナCochinchinaの各国である。

(38) 原綴り *hina nebra*。ここでは黒人女性の意味ではなく、インド人がインドシナ人がマレー人の奴隷の少女を意味すると思われる。

桂林市

すでに述べてきたように、我らの通過してきたクアンシ省の市・町・村はすべて乾燥した不毛の土地に位置していた。しかし一六ある市のうち首邑にして主要なるこの市〔桂林〕はそうではなく、平坦な土地にあり、極端なほどに爽やかで、列挙しうる限りのあらゆる必需品に恵まれている。海からはあまりに遠いため、海の魚には恵まれないものの、しかし新鮮な魚は夥しく、ヴァザールはいつもそれで溢れている。この市は非常に堅牢な、しかも高い城壁で囲まれている。この城壁はたいそう幅も広い。ある日、この市のロウテアたちがそこを行くのを見たが、上のほうをロウテアたちは彼らの輿に乗り、多数の供回りが騎乗して彼らに伴っていた。二列ずつであったが、私が見て確認したところによると、三列でも大丈夫であろう。この城壁はとも高く幅広く、その周囲はいつも長大である。我らのようなやり方でその周囲をゆるめると歩いては、いつまで経ってもその端にはついに達することはできない。

政治的実権を奪われた皇族——諸王分封政策

我らがこの市で実見したところでは、国王はこの市の城壁の内部において一〇〇〇人を超す自らの親戚を起居させている。彼らに執られているやり方とは次のとおりだ。国王は彼らを全市にわたるたいそう広大な邸に分散せしめている。その邸は一見してそれと認識されるよう正面玄関や門を赤く塗ってあり、この色こそ国王の標しに他ならない。こうした邸が一〇〇〇戸ばかりあってしかもそれらが豪壮ではあるのだが、市そのものも巨大であるから、街全体が朱に染まったように見えるわけではない。ここに住む連中は国王との親疎に応じて、結婚後ただちにある種の榮譽だけあつて実の伴わない生活の中に押し込められる。そうした生活は死ぬまで続き、その枠組みからは上にも下にも逸脱することができない。彼らの持つべき妻妾や使用人の支給は国王から行なわれ、月ごとに、これを養うための食糧をきわめて潤沢に貰う。ただし、彼らがこの食糧を受け取るのもろもろの市や省を統治する大官からであり、彼らのうちの誰かが役職を持ったり支配権を得たりすることは生涯にわたって絶対がない。まったくこの連中ときたら、余事は気にも懸けず、こうして飲んだり食ったりしているだけであるので、一様にたいそう肥えており、これまでに逢ったことがなくとも肥えた人を見れば、ただちにこの人は国王の親戚だと言えるほどである。彼らはいささか感じの悪い、礼儀正しく、教養豊かな人々である。それは本当であり、この市にいる間ずっと、彼らのもとにおけるほど面目を施したことはなかったし厚遇されたこともなかった。彼らは我らを自らの邸での飲食のためにしばしば連れ出してくれたし、我らにその気がなかったり不在と知ると、我らのネグロ〔黒人奴隷〕たちを連れ出すのだ。そうして我らに代わって彼らと食卓を共にしたのである。この連中はこうして定住させられ退隠させられた上、一切の必需品を支給される一方、上記のようなくびきを嵌められており、存命する限り、城壁の外へ出ることは決してない。なぜそのように定められているのか、そのわけを尋ねて分かったのであるが、いかなる時にも謀叛を起こす者の出ぬよう、上記のやり方は皇族すべてに適用されているのである。この他にも三つないしは四つの都市に皇族

たちが同じように退隠させられ抑留されている。彼らはその大半が自分たちの流儀でヴィオラを奏でる。彼らにだけこの気晴らしを楽しむことができるよう、皇族のいるこれらの都市では、彼ら以外のなんびともヴィオラを奏でてはいけないことになっている。しかしこの禁令は未婚の婦女および盲人には適用されない。そうした人々もまたヴィオラ演奏の上手であり、ひとかどの楽士である。

さらにこの国王は自らの諸国を安全ならしめ、ひいてはそのすべてにおいていかなる謀叛も起らぬよう方策を講じている。すなわち、国王自身の家に生まれた者でない限り、君主と呼ぶことのできる者はひとりも作らぬようにするのである。ただし、多くの偉い為政者たちがその在職中にいかに奉仕され、いかに威光を笠に着るかは筆舌に尽しがたく、いとも偉大なる君主が欲しい俣にする奉仕なり威光なりもかくやと思われるほどである。ところがこの連中とてあまりにも頻繁に配属と転出とを強いられるから、悪事を企図しうる時間的余裕はまったくない。彼らは在職する限りはたつぷりと俸給を貰う。退隠後も生涯にわたって一定額を貰う。ところで俸給であるが、彼らはそれを受け取るべきそれぞれの市において月に一度、そのために任命された連中からこれを受領する。したがって、国王こそが一切の支配者であり、他のいかなる者も支配者にはなれない。すでに述べたように、一切の支配者たりうるのは国王自身の家に生まれた者だけである。当市の城壁の内側には、要塞まがいに造られた大きな邸が幾つかある。そこに国王の甥、つまり国王のある姉妹の息子が起居している。他の皇族についても同様のことが言える。すでに述べたように彼らが外へ出ることは決してなく、門扉の内に引き籠もってただ飲み食いして耽っているだけだ。そして身辺の世話は宦官たち(captados)に任せ、いかなる事柄にも関わることなく暮らしている。彼らの祝日や、新月・満月の折、大官たちは彼に敬意を表わすためそこへ赴く。同じことは他の皇族すべてにも行なわれるが、表敬訪問を受ける人物の名をヴァン・フォリ⁽³⁹⁾という。

(39) 原綴り Vao Foli. 皇族の住まいである「王府」の対音がそこに住まう

人物の名前と混同されて出来た語彙であろう。

このヴァン・フォリの邸はその周囲にあまり高くない塀を廻らしている。その塀の外側はすべて赤色であり、四角形に造られ、人々の確言するところによれば、ゴアの全周囲にも劣らぬほど大きな規模であるという。塀にはひとつの区画ごとにひとつづつ門扉があり、それぞれの門扉の上には、技術の粋を極めた木製の望楼が付随している。これら四つの門扉のうち最も格式の高い門扉が目抜き通りのひとつにつながっているのであるが、いかなるロウテアであれ、たとえその身分がいかに高かろうと、その前を横切る時は必ず自らが乗っている輿なり馬なりから下りなければならぬ。この四角い敷地の真ん中にヴァン・フォリの閉居する邸があるのだ。我らには中には入れないが、外から受けた印象からしてこれは大した見物であるに違いない。聞いたところによると、屋根は邸のそれにも望楼のそれにもすべて緑の油葉を塗ってあるという。囲われた敷地の大半は一面、野生の樹木によって鬱蒼と覆われている。それらは、オーク・栗・糸杉・松・ヒマラヤ杉、そのほか我らの間にはない種々の野生樹である。したがって、大方の場所であらう爽やかで独特の森を見ることができなのだ。また、この森の中を多くの鹿・ガゼル・牝牛・その他の獣が闊歩している。こうしたものを相手にヴァン・フォリイは時を過ごす。すでに述べたように、そこからは決して出ることなくである。

商品の振り売り

当市、それに私たちが見た他の都市すべてには、我らには極めて好ましいと思われたことがある。それは、実際多くのバザールがあり、そこであらゆるものが売られているにもかかわらず、通りという通りであらゆるものを売り歩く者がいるのだ。すなわち、牛肉や豚肉、生魚や野菜、オリウ油や酢や篩にかけた粉や米など、とどのつまり何もかもである。したがって家庭は使用人を使わずとも済む。なぜならあらゆるものがいやでも戸口へやってくるからだ。当市にいる幾多の商人たちのうち、そ

の大半は郊外に住む。チナのもろもろの都市はすでに述べたように毎夜閉鎖されてしまう上、商人たちはその生業を営むためには市内よりも郊外のほうを好むからだ。

鵜飼

私はこの河で一種の漁を見た。それはここに書かずに済ませるにはあまりに勿体ない代物であった。この河辺で私が多くの時間を費やさざるを得なかったのはひとつにはこの漁のせいであったのだから、ここでそれを述べておくとしよう。国王は大半の河に鵜 (corvos marinhos) を満載した多数の小舟を持っている。これらの鵜はその内側にある籠の中で生まれ、育ち、そして死ぬ。そして月ごとに決まった量の米を貰う。鵜を載せた小舟は国王が大官たちに与えるのである。ひとりひとりへ二艘、三艘、四艘、あるいはおのおのが望むだけの数を、彼らが漁を行なうために。その漁の方法は次のとおりである。漁の時間になると、すべての小舟は集まり、あまり深くない水の上でぐるりとひとつの囲いを作る。ここへ、餌袋のあたりに輪を嵌められ、さらに羽の下を縛られた鵜どもが漁をさせるといふ目的のもとに集められる。ただちに鵜どもは水中へ躍り込む。水中に潜ったままのいれば水面に上がるものもある。私はこれほどの見物をこれまでに見たことがない。鵜どもは餌袋を一杯にすると自分たちの出てきた舟がどれかを知り、獲物を吐き出しにゆく^⑩。そしてすぐに更なる漁へ戻り、飼主たちが欲している分を捕るまで漁を続ける。もし大きな魚に出遭えば、鵜どもはそれを嘴に挟んで持ち帰る。このようにして無数の魚を捕る。漁を終えると、鵜どもは輪を外してもらい、自分自身のために少々の魚を捕る。私の滞留したこの土地にはおよそ二〇艘の小舟があったろうか。この小舟がこうして漁を行なうのを、私はほぼ毎日のように見たのだが、この漁のやり方なり手口なりがいとも新奇なものであったから、いくら見ても飽きてしまうことは全然なかった。

終わり

(40) 原文 os quais como tem os allforges cheos conhece cada hum o seu

barquo onde saem a despejar. アジュタ本では saem が se ven に。「自分たちの戻るべき舟が」と訳文は変わるが論旨は同じ。

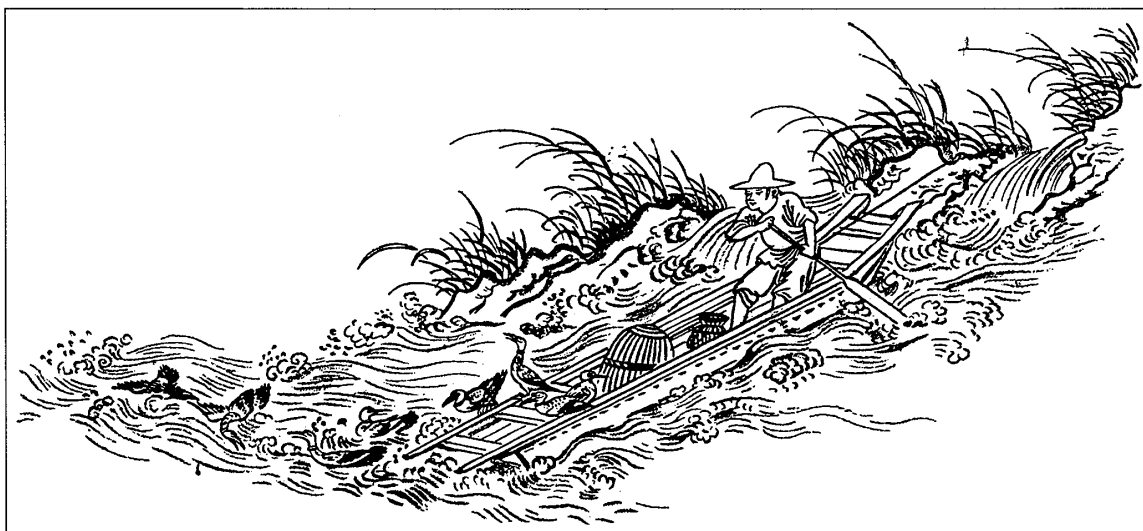


図16 鵜飼い (Gray, China より)